

新田(2)遺跡

— 青森都市計画事業石江土地区画整理事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

(第一分冊 本文・図版編)

2009年3月

青森県教育委員会



調査区全景(SW→)



調査区全景(NW→)



捨て場遺構調査風景



捨て場遺構 土器出土状況①



捨て場遺構 土器出土状況②



捨て場遺構 土器出土状況③



縄文時代の出土遺物



第73号溝跡全景(真上から。写真右上が北。)



第73号溝跡全景(E→)



第73号溝跡土層C-D(E→)



斎串・把手出土状況(W→)



刀形出土状況(SW→)



木製鋤出土状況(W→)



平安時代の出土遺物



土馬(図175-1 第73号溝跡出土)



動物形土製品(図175-2 第73号溝跡出土)



石帶(図127-9 第47号竪穴住居跡出土)



擦文土器(図170-6 第73号溝跡出土)



右写真線刻画の拡大

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成19年度に青森都市計画事業石江土地区画整理事業に伴い青森市新田(2)遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、縄文時代から古代・中世にわたる各種の遺構・遺物が出土し、本遺跡が縄文時代及び平安時代を中心とする集落跡であることが分かりました。

縄文時代では、中期から後期にかけての竪穴住居跡や貯蔵穴と考えられる土坑のほか、斜面から捨て場遺構が検出され、多量の土器や石器・土製品・石製品などが出土地しました。

平安時代では、10世紀後半から11世紀にかけてのものと考えられる多数の竪穴住居跡と、集落を囲むように巡る大規模な溝跡が検出されました。この溝跡からは、土師器や須恵器、擦文土器のほか、椀や曲物などの日用品、農耕具、祭祀具など、木製品も大量に出土しました。中でも祭祀遺物の出土は、本遺跡の性格を考える上で極めて重要です。周囲の遺跡との比較検討をとおして、本遺跡の性格がさらに明らかになると思われます。

本報告書はこれらの調査成果をまとめたものです。この成果が今後、埋蔵文化財の調査・研究及び地域社会の歴史教育等に広く活用されることを期待します。

最後に、発掘調査の実施から報告書の刊行にいたるまで、種々御指導・御協力を賜りました関係各位に対して、厚くお礼を申し上げます。

平成21年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 伊藤博文

例　　言

- 1 本報告書は、青森都市計画事業石江土地区画整理事業に伴い平成19年度に青森県埋蔵文化財調査センターが実施した新田(2)遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 新田(2)遺跡は青森県青森市大字新田字忍39-1外に所在し、青森県遺跡台帳に青森県遺跡番号01080として登録されている。
- 3 本報告書は、第一分冊（本文・図版編）と第二分冊（自然科学分析・写真図版編）から成る。
- 4 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆は、青森県埋蔵文化財調査センター葛城文化財保護主査、田中文化財保護主査、澤田文化財保護主事、中嶋総括主幹、小田川文化財保護主幹、平山文化財保護主査、神昌樹文化財保護主査、中村調査補助員が担当し、執筆者名を各文末に記した。依頼原稿については、文頭に執筆者名を記した。
- 5 発掘調査及び整理作業・報告書作成の経費は、調査を委託した青森市が負担した。
- 6 資料・試料の分析や鑑定については、下記のとおり依頼・委託した（敬称略）。

石器の質質鑑定・火山灰分析　　国立大学法人 弘前大学理工学部 教授　柴 正敏
放射性炭素年代測定　　株式会社 加速器分析研究所
炭化種子の同定　　札幌国際大学博物館 客員研究員　椿坂 勝代
木製品の樹種同定　　国立大学法人 東北大学学術資源研究公開センター
　　　　　　　　　　　　植物園園長　鈴木 三男

炭化材の樹種同定　　株式会社 バレオ・ラボ
出土遺物の漆塗膜分析　　株式会社 吉田生物研究所
出土遺物の胎土分析　　東海大学 準教授　松本 建速

- 7 写真撮影・遺物実測の一部については、下記のとおり委託した。

出土遺物の写真撮影　　シルバーフォト、スタジオエイト
縄文土器の実測　　株式会社 シン技術コンサル
剥片石器の実測　　株式会社 シン技術コンサル、株式会社 ラング

- 8 陶器は平泉町役場 八重樫忠郎氏、弘前大学 関根達人氏に、縄文土器の付着物は山形芸術工科大学 松田泰典氏にそれぞれご教示いただいた。感謝申し上げる次第である。
- 9 本書に掲載した地形図（遺跡の位置と周辺の主な遺跡）は、青森市教育委員会発行の「青森市遺跡地図（平成20年1月4日現在）」を部分的に複写したものである。
- 10 掛図の縮尺は各図にスケールを付した。
- 11 遺物写真的縮尺は任意不同である。遺物写真番号は掛図番号と一致する。
- 12 遺構・遺物の表現は、原則として次の基準・様式に拠った。
 - (1) 掛図に付した方位は座標北であり、公共座標は日本測地系に基づいている。
 - (2) 堆積土の注記には『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄 2004・2005）を用い、混入物の含有度については室内整理の段階で次のような表記に統一を図った。「微量」（1～5%未満）、「少量」（5～15%未満）、「中量」（15～30%未満）、「多量」（30%以上）。
 - (3) 層番号は遺構内堆積土に算用数字を行い、遺構外自然堆積層にはローマ数字を用いている。
 - (4) 遺構については巻末に観察表を付し、検出層位、位置、規模及び諸特徴を一覧できるようにした。なお、計測値の（ ）は残存値を示す。

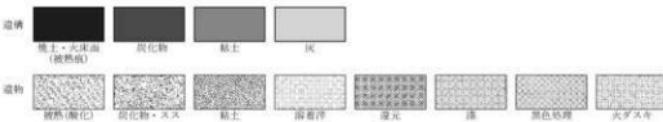
(5) 遺構内で検出されたピットについては、検出面からの深さを挿図中に括弧付きで表記している。数値の単位はcmである。

(6) 遺物については巻末に観察表を付し、出土地点・法量及び諸特徴を一覧できるようにした。なお、計測値の()は推定値、()は残存値を表す。

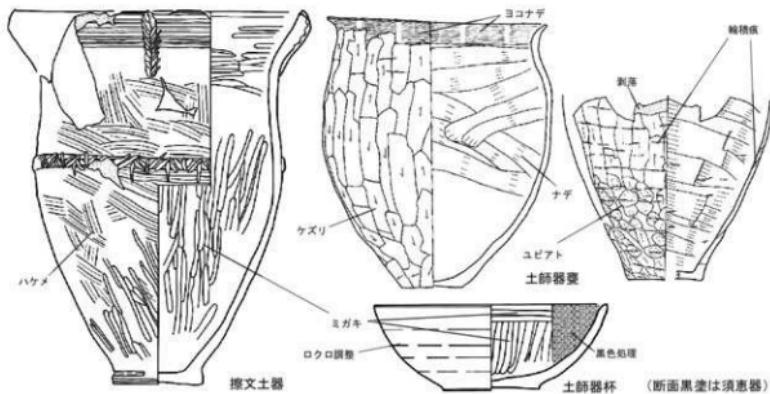
(7) 挿図中の重複関係にある遺構名については、略号表記によって図示している。遺構の略号は下記の通りである。

S I : 竪穴住居跡・竪穴建物跡、S K : 土坑、S D : 溝跡、S B : 掘立柱建物跡、S E : 井戸跡、S V : 溝状土坑、S R : 土器埋設遺構、S N : 焼土遺構、S X : 用途不明遺構、S P : ピット（例：SI01：第1号竪穴住居跡）

(8) 遺構・遺物図版に使用したスクリーントーンは下記の通りである。



(9) 遺物図版・観察表で使用している記号、スクリーントーン、属性基準は下記の通りである。



(10) 遺物分布図で使用している記号は下記の通りである。

土器 : ● 石器 : ■ 鉄製品 : ▲ 木製品 : ★ 土製品 : ○ 石製品 : □

13 引用・参考文献については、巻末に収めた。

14 発掘調査及び報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。

15 発掘調査及び本報告書作成にあたって、下記の諸氏・機関から御協力・御助言を頂いた。記して感謝申し上げる次第である。（五十音順、敬称略）

岩井浩介、遠藤正夫、小笠原雅行、小口雅史、小野貴之、葛西勲、川口潤、木村浩一、木村淳一、斎藤岳、佐々木由香、鈴木和子、鈴木靖民、瀬川滋、関根達人、相馬信吉、永嶋豊、八重樫忠郎

第一分冊 目 次

口絵

序

例言

目次

挿図目次

第1章 調査の概要

第1節 発掘調査に至る経過	1
第2節 調査要項	1
第3節 調査経過	2
第4節 調査方法と整理方法	3

第2章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡	4
第2節 遺跡周辺の地形と地質	8
第3節 基本層序	9

第3章 繩文時代の検出遺構と出土遺物

第1節 積穴住居跡	11
第2節 土坑	19
第3節 溝状土坑	29
第4節 土器埋設遺構	32
第5節 焼土遺構	33
第6節 捨て場遺構	33
第7節 遺構外出土遺物	74

第4章 平安時代の検出遺構と出土遺物

第1節 積穴住居跡	93
第2節 土坑	167
第3節 溝跡	187
第4節 井戸跡	239
第5節 用途不明遺構	243
第6節 ピット	243
第7節 遺構外出土遺物	254

第5章 中世の検出遺構と出土遺物

第1節 積穴建物跡	263
第2節 土坑	266
第3節 溝跡	268
第4節 挖立柱建物跡	271

第6章 時期不明の検出遺構

第1節 土坑	273
第2節 焼土遺構	279

第7章 まとめ

引用・参考文献	284
遺構一覧表	286
遺物観察表	291
報告書抄録	

挿図目次

図1 遺跡の位置と周辺の遺跡	5	図55 捨て場遺構出土土製品(1)	72
図2 調査区位置図	6	図56 捨て場遺構出土土製品(2)・石製品	73
図3 グリッド配置図	7	図57 繩文時代の遺構外出土土器(1)	75
図4 基本層序	10	図58 繩文時代の遺構外出土土器(2)	76
図5 基本層序位置図	10	図59 繩文時代の遺構外出土石器(1)	81
図6 第1号竪穴住居跡	13	図60 繩文時代の遺構外出土石器(2)	82
図7 第12・14号竪穴住居跡	14	図61 平安時代遺構内出土繩文石器(1)	83
図8 第26号竪穴住居跡	15	図62 平安時代遺構内出土繩文石器(2)	84
図9 第49号竪穴住居跡	16	図63 平安時代遺構内出土繩文石器(3)	85
図10 第50号竪穴住居跡	18	図64 平安時代遺構内出土繩文石器(4)	86
図11 繩文時代の土坑(1)	20	図65 平安時代遺構内出土繩文石器(5)	87
図12 繩文時代の土坑(2)	21	図66 平安時代遺構内出土繩文石器(6)	88
図13 繩文時代の土坑(3)	22	図67 平安時代遺構内出土繩文石器(7)	89
図14 繩文時代の土坑(4)	23	図68 平安時代遺構内出土繩文石器(8)	90
図15 繩文時代の土坑出土遺物(1)	24	図69 繩文時代の遺構外出土土製品・石製品	91
図16 繩文時代の土坑出土遺物(2)	25	図70 繩文時代遺構内出土石器	92
図17 繩文時代の土坑出土遺物(3)	26	図71 第2号竪穴住居跡(1)	94
図18 繩文時代の土坑出土遺物(4)	27	図72 第2号竪穴住居跡(2)	95
図19 繩文時代の土坑出土遺物(5)	28	図73 第3・4号竪穴住居跡	97
図20 溝状土坑(1)	30	図74 第6・9号竪穴住居跡(1)	99
図21 溝状土坑(2)	31	図75 第6・9号竪穴住居跡(2)	100
図22 土器埋設遺構	32	図76 第6・9号竪穴住居跡(3)	101
図23 繩文時代の燒土遺構	33	図77 第7・8号竪穴住居跡	103
図24 捨て場遺構出土土器重量分布図	34	図78 第10号竪穴住居跡(1)	105
図25 繩文時代の遺構分布図	34	図79 第10号竪穴住居跡(2)	106
図26 捨て場遺構出土繩文土器(1)	36	図80 第11号竪穴住居跡(1)	108
図27 捨て場遺構出土繩文土器(2)	37	図81 第11号竪穴住居跡(2)	109
図28 捨て場遺構出土繩文土器(3)	38	図82 第13号竪穴住居跡(1)	110
図29 捨て場遺構出土繩文土器(4)	39	図83 第13号竪穴住居跡(2)	111
図30 捨て場遺構出土繩文土器(5)	40	図84 第13号竪穴住居跡(3)	112
図31 捨て場遺構出土繩文土器(6)	41	図85 第15号竪穴住居跡	114
図32 捨て場遺構出土繩文土器(7)	42	図86 第16号竪穴住居跡(1)	115
図33 捨て場遺構出土繩文土器(8)	43	図87 第16号竪穴住居跡(2)	116
図34 捨て場遺構出土繩文土器(9)	46	図88 第18号竪穴住居跡(1)	118
図35 捨て場遺構出土繩文土器(10)	47	図89 第18号竪穴住居跡(2)	119
図36 捨て場遺構出土繩文土器(11)	48	図90 第18号竪穴住居跡(3)	120
図37 捨て場遺構出土繩文土器(12)	49	図91 第19号竪穴住居跡(1)	121
図38 捨て場遺構出土繩文土器(13)	50	図92 第19号竪穴住居跡(2)	122
図39 捨て場遺構出土繩文土器(14)	51	図93 第20号竪穴住居跡	123
図40 捨て場遺構出土繩文土器(15)	52	図94 第21号竪穴住居跡	124
図41 捨て場遺構出土繩文土器(16)	54	図95 第22号竪穴住居跡(1)	125
図42 捨て場遺構出土石器(1)	58	図96 第22号竪穴住居跡(2)	126
図43 捨て場遺構出土石器(2)	59	図97 第24号竪穴住居跡	128
図44 捨て場遺構出土石器(3)	60	図98 第25号竪穴住居跡	130
図45 捨て場遺構出土石器(4)	61	図99 第27号竪穴住居跡	131
図46 捨て場遺構出土石器(5)	62	図100 第28号竪穴住居跡	133
図47 捨て場遺構出土石器(6)	63	図101 第29号竪穴住居跡	134
図48 捨て場遺構出土石器(7)	64	図102 第30号竪穴住居跡(1)	135
図49 捨て場遺構出土石器(8)	65	図103 第30号竪穴住居跡(2)	136
図50 捨て場遺構出土石器(9)	66	図104 第31号竪穴住居跡	137
図51 捨て場遺構出土石器(10)	67	図105 第32号竪穴住居跡	139
図52 捨て場遺構出土石器(11)	68	図106 第33号竪穴住居跡(1)	141
図53 捨て場遺構出土石器(12)	69	図107 第33号竪穴住居跡(2)	142
図54 捨て場遺構出土石器(13)	70	図108 第33号竪穴住居跡(3)	143

挿図目次

図109 第33号竪穴住居跡(4)	144
図110 第34号竪穴住居跡	145
図111 第35号竪穴住居跡	146
図112 第36号竪穴住居跡	147
図113 第37号竪穴住居跡	148
図114 第39号竪穴住居跡(1)	150
図115 第39号竪穴住居跡(2)	151
図116 第39号竪穴住居跡(3)	152
図117 第39号竪穴住居跡(4)	153
図118 第40号竪穴住居跡	154
図119 第43・44号竪穴住居跡(1)	156
図120 第43・44号竪穴住居跡(2)	157
図121 第45号竪穴住居跡(1)	159
図122 第45号竪穴住居跡(2)	160
図123 第45号竪穴住居跡(3)	161
図124 第46号竪穴住居跡(1)	163
図125 第46号竪穴住居跡(2)	164
図126 第47号竪穴住居跡(1)	165
図127 第47号竪穴住居跡(2)	166
図128 平安時代の土坑(1)	171
図129 平安時代の土坑(2)	172
図130 平安時代の土坑(3)	173
図131 平安時代の土坑(4)	174
図132 平安時代の土坑(5)	175
図133 平安時代の土坑(6)	176
図134 平安時代の土坑(7)	177
図135 平安時代の土坑(8)	178
図136 平安時代の土坑(9)	179
図137 平安時代の土坑(10)	180
図138 平安時代の土坑(11)	181
図139 平安時代の土坑(12)	182
図140 平安時代の土坑出土遺物(1)	183
図141 平安時代の土坑出土遺物(2)	184
図142 平安時代の土坑出土遺物(3)	185
図143 平安時代の土坑出土遺物(4)	186
図144 平安時代の溝跡(1)	188
図145 平安時代の溝跡(2)	189
図146 平安時代の溝跡(3)	190
図147 平安時代の溝跡(4)	191
図148 平安時代の溝跡(5)	192
図149 平安時代の溝跡(6)	193
図150 平安時代の溝跡(7)	194
図151 平安時代の溝跡(8)	195
図152 平安時代の溝跡(9)	197・198
図153 平安時代の溝跡(10)	200
図154 平安時代の溝跡(11)	201
図155 平安時代の溝跡出土遺物(1)	210
図156 平安時代の溝跡出土遺物(2)	211
図157 平安時代の溝跡出土遺物(3)	212
図158 平安時代の溝跡出土遺物(4)	213
図159 平安時代の溝跡出土遺物(5)	214
図160 平安時代の溝跡出土遺物(6)	215
図161 平安時代の溝跡出土遺物(7)	216
図162 平安時代の溝跡出土遺物(8)	217
図163 平安時代の溝跡出土遺物(9)	218
図164 平安時代の溝跡出土遺物(10)	219
図165 平安時代の溝跡出土遺物(11)	220
図166 平安時代の溝跡出土遺物(12)	221
図167 平安時代の溝跡出土遺物(13)	222
図168 平安時代の溝跡出土遺物(14)	223
図169 平安時代の溝跡出土遺物(15)	224
図170 平安時代の溝跡出土遺物(16)	225
図171 平安時代の溝跡出土遺物(17)	226
図172 平安時代の溝跡出土遺物(18)	227
図173 平安時代の溝跡出土遺物(19)	228
図174 平安時代の溝跡出土遺物(20)	229
図175 平安時代の溝跡出土遺物(21)	230
図176 平安時代の溝跡出土遺物(22)	231
図177 平安時代の溝跡出土遺物(23)	232
図178 平安時代の溝跡出土遺物(24)	233
図179 平安時代の溝跡出土遺物(25)	234
図180 平安時代の溝跡出土遺物(26)	235
図181 平安時代の溝跡出土遺物(27)	236
図182 平安時代の溝跡出土遺物(28)	237
図183 平安時代の溝跡出土遺物(29)	238
図184 平安時代の井戸跡(1)	240
図185 平安時代の井戸跡(2)	241
図186 平安時代の井戸跡出土遺物	242
図187 平安時代の用途不明遺構	244
図188 ピット集中区分割図	246
図189 ピット集中区(1)	247
図190 ピット集中区(2)	248
図191 ピット集中区(3)	249
図192 ピット集中区(4)	250
図193 ピット集中区(5)	251
図194 平安・中世・時期不明のピット	252
図195 ピット出土遺物	253
図196 平安時代の遺構外出土遺物(1)	258
図197 平安時代の遺構外出土遺物(2)	259
図198 平安時代の遺構外出土遺物(3)	260
図199 平安時代の遺構外出土遺物(4)	261
図200 平安時代の遺構外出土遺物(5)	262
図201 第41号竪穴建物跡	264
図202 第51号竪穴建物跡	265
図203 中世の土坑	267
図204 中世の土坑出土遺物	268
図205 中世の溝跡	269
図206 中世の溝跡出土遺物	270
図207 挖立柱建物跡配置図	272
図208 時期不明の土坑(1)	275
図209 時期不明の土坑(2)	276
図210 時期不明の土坑(3)	277
図211 時期不明の土坑(4)	278
図212 時期不明の焼土遺構	279

付図 遺構配置図

第1章 調査の概要

第1節 発掘調査に至る経過

青森市では、東北新幹線新青森駅が設置される予定の石江地区の都市基盤整備が立ち遅れていることから、都市計画道路や都市公園等の整備を行い新青森駅周辺にふさわしい土地利用の促進を目的として、平成14年度から石江土地区画整理事業を進めてきた。約46.2haの事業計画地内に所在する埋蔵文化財包蔵地については、青森市教育委員会文化財課が平成13・14年度に試掘・確認調査を実施し、その結果に基づいて既存の10遺跡を新田(1)遺跡、新田(2)遺跡、高間(1)遺跡、高間(6)遺跡、新城平岡(2)遺跡、新城平岡(4)遺跡の6遺跡に統廃合した。さらに青森市教育委員会は、平成15年度から新田(1)遺跡、高間(1)遺跡、高間(6)遺跡、新城平岡(4)遺跡の本発掘調査を行ってきた。新田(2)遺跡については、平成19年度に青森市教育委員会が本発掘調査を実施する予定だったが、隣接する新田(1)遺跡の調査結果等からみて、新田(2)遺跡の調査では相当量の遺構・遺物が出土するものと予想されたので、青森市教育委員会単独での平成19年度内調査終了は困難な状況にあった。しかし、平成19年度中に新田(2)遺跡の調査を終了できなければ、石江土地区画整理事業が遅延するだけでなく、当該事業計画地内に用地が所在する東北新幹線の工事にも支障をきたすことになると考えられた。このため、平成18年12月～平成19年1月に青森市教育委員会と青森県教育文化財保護課が協議を重ねた結果、青森県教育委員会が青森市教育委員会の新田(2)遺跡発掘調査事業を支援することになった。文化財保護課は、青森県教育委員会の平成19年度発掘調査事業の再調整等を行った上で青森県埋蔵文化財調査センターと協議し、平成19年度に埋蔵文化財調査センターが新田(2)遺跡発掘調査事業のうち約5,000m²の発掘調査を分担して実施することで合意した。これを受けて平成19年3月には、青森市教育委員会文化財課、青森市都市整備部石江区画整理事務所、文化財保護課及び埋蔵文化財調査センターが受託契約の事務手続きや発掘調査計画、発掘作業員の雇用等についての打合せを行った。なお、新田(2)遺跡に係る土木工事等のための発掘に関する通知は、平成15年6月に青森市長名で提出され、同年同月に文化財保護課から当該発掘前における埋蔵文化財の記録の作成を目的とする発掘調査の実施が指示された。

第2節 調査要項

1 調査目的

青森都市計画事業石江土地区画整理事業の実施に先立ち、当該地区に所在する新田(2)遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して地域社会の文化財の活用に資する。

2 発掘調査期間 平成19年5月8日～同年11月9日

3 遺跡名及び所在地 新田(2)遺跡（青森県遺跡番号01080）
青森市大字新田字忍39-1外

4 調査面積 5,000平方メートル

5 調査委託者 青森市

6 調査受託者 青森県教育委員会

7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査体制

調査指導員	藤沼 邦彦	国立大学法人 弘前大学人文学部教授(考古学)(平成20年3月退職)
調査員	伊藤 博幸	奥州市埋蔵文化財調査センター所長 (考古学)
	三浦 圭介	前青森県埋蔵文化財調査センター次長 (考古学)
	柴 正敏	国立大学法人 弘前大学理工学部教授 (地質学)
	鎌田耕太郎	国立大学法人 弘前大学教育学部教授 (地質学)
	高島 成佑	前八戸工業大学教授 (建築学)
	光谷 拓実	独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター 年代学研究室室長 (年輪年代学)
調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター	
所長	末永 五郎	(平成20年3月退職)
次長	三宅 徹也	(平成20年3月退職)
総務G.L.	櫻庭 孝雄	
調査第二G.L.	工藤 大	(現次長)
文化財保護主査	葛城 和穂	
文化財保護主査	田中 珠美	
文化財保護主事	山田 雄正	(平成20年3月退職)
調査補助員	常田 貴仁、工藤 浩子、中村 华人	
	小向 良、新山 美樹	

第3節 調査経過

5月8日に機材を搬入し、調査を開始した。本遺跡の東側に隣接し、平成15年度から青森市教育委員会で行っている新田(1)遺跡の調査成果から、本遺跡からも多量の遺構・遺物が検出されることは明らかであった。そのため機材搬入に先立ち、重機による表土除去作業を行い、調査の効率化を図った。

表土を除去したところ、当初の予想を上回る数の遺構が検出された。遺構の調査は、丘陵先端部にあたる調査区西側から開始した。しかし、遺構同士の重複が激しく、また第Ⅱ層である砂層を掘り込んで構築されているものは、遺構の確認が困難な上に崩落しやすく、作業は難航した。

7月に入ると猛暑が続き、さらに調査は困難なものとなった。それでも、8月9日には調査面積の約4割の調査が終了し、一回目の空中写真撮影を行った。また8月中旬には、調査区ほぼ全域の遺構確認作業が終了した。その結果、当初遺構の分布が希薄と思われていた調査区北側から、多数の溝跡が重複した状態で検出された。また、他の区域から多くの遺構が検出されていたため、現有の体制では期間内の調査終了が困難となった。これを受けて文化財保護課及び原因者と協議を行い、8月21日から職員、調査補助員各1名及び発掘調査作業員11名を増員することとした。

9月に入ると竪穴住居跡などの調査と並行して、調査区北側の溝跡の調査を本格的に行った。しかし、大型の溝跡である第59・73号溝跡は、他遺構との重複が激しいこと、斎串や形代などの木製品をはじめとする遺物が大量に出土したこと、そして湧水の影響で當時排水を行わなければならなかつたことなどから調査は難航した。また、調査区西側の丘陵先端部では、縄文時代の包含層である第Ⅲ

層中に縄文時代中期前葉及び後期前葉を主体とする捨て場遺構が形成されていることが新たに判明した。このため再度協議を行い、調査期間を当初の10月31日から11月9日まで延長することとした。

10月中旬には、さらに職員1名と調査補助員1名の増員を行った。また、10月19日に二回目の空中写真撮影を行い、第II層を掘り込んでいた平安時代の遺構の調査はほぼ終了した。

10月下旬には、調査の終了した第II層を重機で除去し、縄文時代の捨て場遺構の調査を本格的に開始した。しかし、大量の湧水で足下は常に不安定であり、足場を組んでの作業となった。

11月に入ると、県内各地の調査を終えた職員並びに調査補助員の応援を受け、捨て場遺構の調査が佳境に入った。捨て場遺構からは、全遺物量のおよそ三分の一にあたる、段ボール箱約100箱分の遺物が出土した。11月9日には機材を撤収し、全ての調査を終了した。

第4節 調査方法と整理方法

1 調査方法

測量用杭・水準点については、青森市教育委員会が工事用の4級測量基準点を基に調査区内に打設したものを基準とした。グリッド呼称については、日本測地系X = 92,100、Y = 11,500を起点とし、これを南東隅とする一辺4mの正方形の範囲をIA-00とした。そして北方向にローマ数字とアルファベットの組み合わせ（IA・IB…IZ・IIA…）、西方向に算用数字（1・2・3…）で表記した。つまり、IA-00から北に4m、西に8mのグリッドはIB-02となる。

調査は、グリッド法及び分層発掘を基本とした。表土の除去・搬出は主に重機を使用した。その後の遺構検出作業及び精査は人力で行った。

遺構の精査は二分法・四分法で行った。遺構の実測は、遺構実測支援システム「遺構くん」（株式会社CUBIC）を用いた光波測量と簡易遺り方を併用して行った。作成した図面の縮尺は20分の1を基本としたが、状況に応じて10分の1、40分の1なども使用した。遺構番号は検出順に付したが、調査の進展及びその後の整理作業において変更や欠番が生じたものもある。土層の名称は、基本層序については表土から下層に向かってローマ数字を付し、細分される土層はさらに小文字のアルファベットを附加した。遺構の堆積土は上層から下層に向かって算用数字を付した。土層観察に当たっては、『新版標準土色帖』（小川忠志・竹原秀雄2004・2005）を用い、土色とマンセル記号を併記し、混入物などの特徴を記載した。

写真撮影は35mmモノクロネガ、カラーリバーサル、デジタルカメラの3種類を使用し、遺構検出状況、土層堆積状況、遺物出土状況、完掘状況、作業状況などを撮影した。

2 整理方法

遺物は、水洗・乾燥・注記を行った後、接合・復元を行った。その後、実測・採拓・トレース・写真撮影を行った。また出土した金属製品には、必要に応じて保存処理を施した。

出土遺物及び現場で採取した土壤サンプルの中には、自然科学分析を行ったものもある。これらの分析結果については第8章を参照されたい。

遺構は図面修正を行った後、遺構実測支援システム「遺構くん」並びに遺物分布図等作成システム「トレースくん」（株式会社CUBIC）を用いてトレース・図版作成を行った。

（葛城）

第2章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡（図1・2）

新田(2)遺跡は、青森市西部、JR新青森駅から北へ約500mに位置する。新城川右岸の沖積地及び丘陵上に位置し、標高は約6～8mである。遺跡周辺の詳細な地形・地質については第2節を参照されたい。周辺の遺跡については、既往の報告書で多くが述べられているため、ここでは最近の調査事例を中心に概観する。

新城川右岸の丘陵及びそれに連なる沖積低地では、東北新幹線建設事業及びそれに伴う土地区画整理事業によって、本遺跡を含むいわゆる石江遺跡群の調査が進められている。石江遺跡群は青森市西部の石江地区に所在する、高間(1)・(6)遺跡、新田(1)・(2)遺跡、新城平岡(2)・(4)・(5)遺跡を便宜的に総称した呼称である。この石江遺跡群の東側には岡部遺跡、西側には西高校遺跡が所在する。さらに約1km南の丘陵には石江遺跡、江渡遺跡が立地する。沖館川左岸には縄文時代中期～末葉を中心とする三内沢部(1)・(2)・(3)遺跡が、右岸には国特別史跡三内丸山遺跡が立地する。

本遺跡の東側に隣接する新田(1)遺跡は、国道7号線西バイパスを挟んで南北に広がっており、北側を青森県教育委員会が平成17年度から、南側を青森市教育委員会が平成15年度からそれぞれ発掘調査を実施している。このうち青森市教育委員会調査分の東北新幹線建設事業に係る範囲の調査結果が報告されている（青森市教育委員会2007）。それによると、丘陵上と沖積地上の2地点の調査を行つており、丘陵上からは平安時代の堅穴建物跡2棟、中世の掘立柱建物跡5棟、古代から中世のピット371基などが検出された。沖積地上からは平安時代の溝跡6条などが検出された。この溝跡からは、木簡・斎串などの祭祀具、曲物・下駄などの生活用品など多量の木製品が出土した。中でも木簡、扇は県内の古代の資料としては初の出土であり注目される。

高間(1)遺跡は新田(1)遺跡と同様に、東北新幹線建設事業に伴い発掘調査が実施されている。その結果、標高5.7～8.5mの丘陵上から平安時代の堅穴建物跡1軒、土坑11基、溝跡9条、複数の掘立柱建物跡などが検出された。また、両遺跡を含む石江遺跡群は区画整理事業に伴う発掘調査も実施されている。このことから、両遺跡の評価についてはこれらの成果も踏まえて総合的に検討される必要がある。

石江遺跡は縄文時代前期中～末葉（円筒下層a～d₂式期）を中心とする堅穴住居跡の他に、墓と考えられるものを含む土坑141基が検出された。これらの中には墓と考えられる、多数の石鏡やアスファルトが一括して出土するものもあり、当時の葬制を考える上で貴重な資料である（青森県教育委員会2008）。

三内沢部(3)遺跡は、青森県教育委員会及び青森市教育委員会によって調査が行われている。青森県教育委員会調査区からは、縄文時代中期及び平安時代の堅穴住居跡が合わせて12軒検出された。また、中世と考えられる掘立柱建物跡も検出され、縄文時代中期、平安時代中頃、中世にわたる複合遺跡と確認された（青森県教育委員会2008）。

（葛城）



遺跡名	遺跡番号	所在地	種別	時代・時期	関連文献
新田(2)遺跡	01080	青森市新田字忌	集落跡	縄文(前~晩)・平安・中世	本教告書 青森市教委2007
新田(1)遺跡	01078	青森市新田字忌はか	集落跡	縄文(前~晩)・平安・中世	青森市教委2007
高間(1)遺跡	01070	青森市石江字高間	集落跡	縄文(前~晩)・平安	青森市教委2007
高間(6)遺跡	01075	青森市石江字高間	集落跡	縄文(中~後)・平安・近世	
同部遺跡	01076	青森市石江字同部	散在地	縄文	
江瀬遺跡	01163	青森市石江字江瀬	集落跡	縄文(前~後)・平安・近代	青森市教委2004
石平遺跡	01056	青森市石字平山	集落跡・城壁	縄文(前~中)	県教委2008
新城平岡(2)遺跡	01069	青森市新城字平岡	集落跡	縄文(後)・平安	
新城平岡(4)遺跡	01074	青森市新城字平岡	集落跡	縄文(前~晩)・平安・近世	
新城平岡(5)遺跡	01079	青森市新城字平岡	散在地	平安	
西高校遺跡	01082	青森市新城字平岡	散在地	弥生・平安	
安田近野(2)遺跡	01309	青森市安田字近野	散在地	縄文(前)	
近野遺跡	01065	青森市安田字近野はか	集落跡	縄文(中~後)・平安	県教委1974~2004~2006
三内尻部(1)遺跡	01064	青森市三内字尻部	集落跡	縄文(早~後)	県教委1978
三内尻部(2)遺跡	01162	青森市三内字尻部	散在地	縄文(中)	
三内尻部(3)遺跡	01239	青森市三内字尻部	集落跡	縄文(中)・平安・中世	県教委2005~2008 青森市教委2002~2006
三内丸山遺跡	01018	青森市三内字丸山	集落跡	縄文(前・中)	青森市教委1962
三内遺跡	01019	青森市三内字丸山	集落跡	縄文(中~後)・平安	県教委1978
三内丸山遺跡	01021	青森市三内字丸山	集落跡	縄文・平安・中世	県教委1984ほか
三内丸山(3)遺跡	01248	青森市三内字丸山	散在地	平安	
三内丸山(5)遺跡	01250	青森市三内字丸山	集落跡	縄文(中~晩)・平安	県教委2004
三内丸山(8)遺跡	01315	青森市三内字丸山	集落跡	縄文・平安	青森市教委2005
三内丸山(9)遺跡	01321	青森市三内字丸山	集落跡	縄文(早~晩)・平安	県教委2007~2008
魚崎(1)遺跡	01011	青森市内字丸山	散在地	縄文(前)	
魚崎(2)遺跡	01012	青森市魚崎字平岡	散在地	縄文(前・晩)	

図1 遺跡の位置と周辺の遺跡

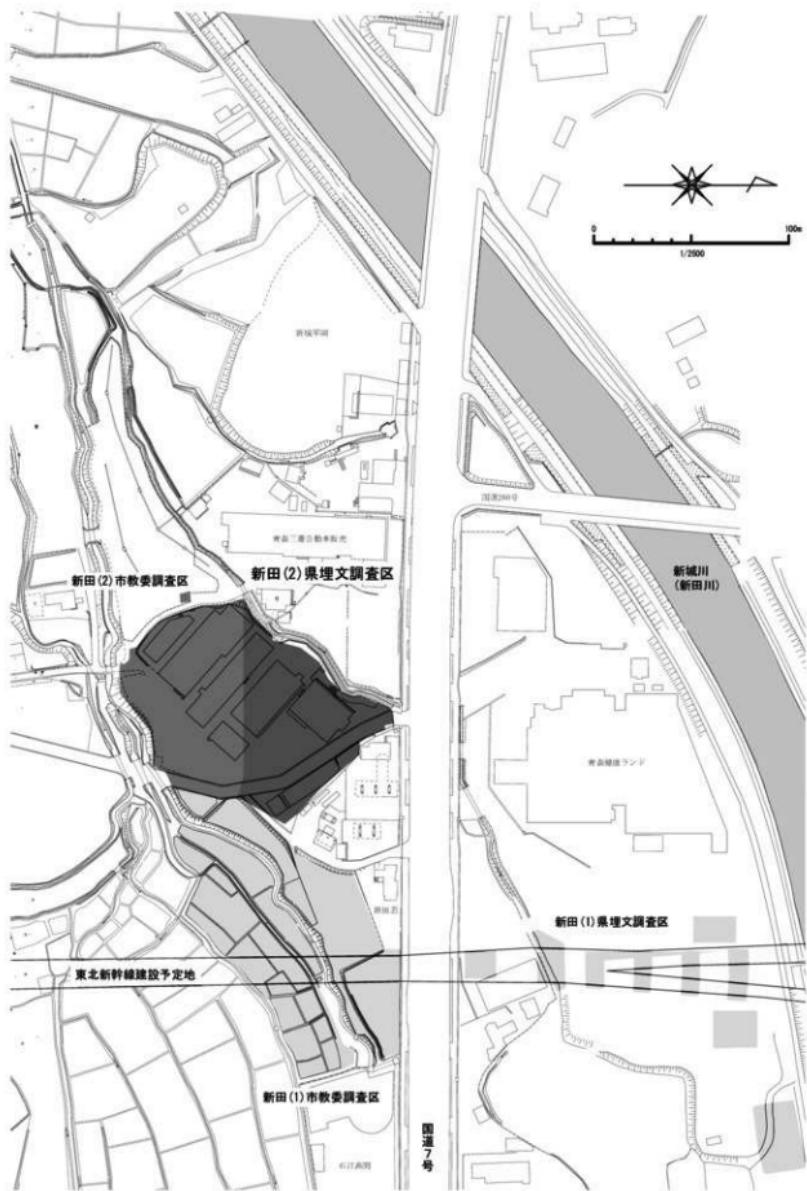


図2 調査区位置図

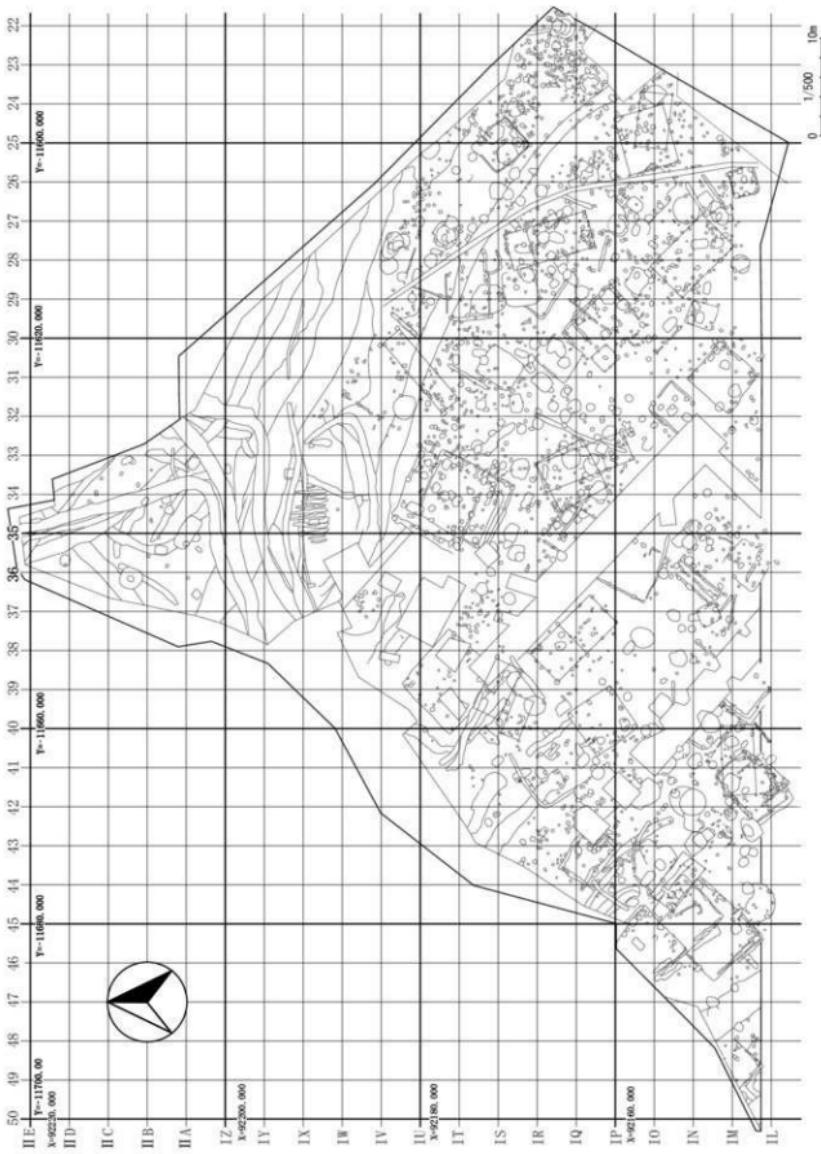


図3 グリッド配置図

第2節 遺跡周辺の地形と地質

弘前大学理工学部
地球環境学科 柴 正敏

新田(2)遺跡は、青森市の西部に位置し、「青森平野」の西端部に立地する。

「青森平野」の地形を概説すれば、次の通りである：北側は青森湾に対し弓状の海岸線、西側は八甲田火碎流堆積物よりなる大沢丘陵、南側は八甲田火山の山麓部、東側は主に新第三系からなる夏泊半島に囲まれた沖積平野である。この沖積平野の形成には、新田川(平野西部)、堤川(平野中部)、野内川(平野東部)などの中小の河川が関与している。

新田(2)遺跡周辺の地形の形成を扱った研究は少なく、水野・堀田(1982)、高橋(1995)及び久保ほか(2006)を挙げることができる。

水野・堀田(1982)は、新田(2)遺跡地域を含む青森平野西部の地形分類を行なった。水野・堀田(1982)の地形分類によれば、新田(2)遺跡は扇状地及び谷底平野からなる。

高橋(1995)は、三内丸山遺跡の立地条件を考察する際に、青森平野北部にはかつて広くラグーン帯が広がっており、その後の海退に伴い、三角州帯に移化したとしている。

久保ほか(2006)は、空中写真及びボーリングコア資料を用いて青森平野の詳細な微地形解析を行い、山地・丘陵、台地・段丘、低位段丘、扇状地、自然堤防、砂州、旧河道、低湿地及びその他の低地に分けています。これに基づき、青森平野は単純な「海岸平野」ではなく、海岸部の浜堤列と中小河川の自然堤防が発達し、全体的に低平な「後背湿地的な平野」であるとした(久保ほか、2006)。

これらの調査・研究を総括すると、新田(2)遺跡の地形は河川堆積物よりなる扇状地及び谷底平野とすることができます。この谷底平野には、新田川により形成された微地形である後背湿地、自然堤防、旧河道が認められる(久保ほか、2006)。

本遺跡を構成する地層は第四紀の河川堆積物からなり、その後背地を推定する際に重要な新田川中～上流部に分布する地層について述べる。時代の古い順に、鮮新統の大滝沢層(主に軽石凝灰岩)・大沢丘陵層(海成の砂岩・シルト岩)・鶴ヶ坂層(軽石凝灰岩)、更新統の岡町層(粘土、礫、砂)・八甲田第1期及び第2期火碎流堆積物(軽石、火山灰)・十和田大不動及び八戸火碎流堆積物(軽石、火山灰)である。さらに、土壤中には、十和田aテフラ(To-a、西暦915年)及び白頭山苦小牧テフラ(B-Tm、西暦937～938年)が挟在する。

第8章第2節及び隣接する新田(1)遺跡の報告書(柴、2009 a)でも述べたように、堆積物には火山ガラスが含まれており、その化学組成について電子プローブマイクロアナライザーを用いて調べ、ガラスを供給したテフラを推定した。新田(1)遺跡の河川堆積物では、十和田系テフラのほかに八甲田第1期火碎流堆積物及び大滝沢軽石凝灰岩(大沢丘陵・大滝沢凝灰岩部層)起源のガラスよりなると推定できた(柴、2009 a)。新田(2)遺跡の堆積物試料も同様の火山ガラス及び鉱物構成を有している。すなわち、ガラスの形態は主に軽石型で、バブルウォール型を少量含み、構成鉱物は、斜長石、石英(両錐形)、斜方輝石、單斜輝石、ホルンブレンド(少量)、鉄鉱及びイルメナイトであり、海綿骨針を多量に含み、珪藻及びOSTが認められる。すなわち、これら河川堆積物の供給元は、河川上

流部に分布する、大糸迦層、大滝沢凝灰岩部層、八甲田第1期火砕流堆積物及び十和田系テフラであることが示される。

引用文献

- 久保純子・辻誠一郎・村田泰輔・辻圭子・後藤香奈子、(2006)、最終氷期以降の青森平野の環境変遷史、植生史研究、特別第2号、7-17。
 高橋 学、(1995)、ラグーンを臨む台地での生活—三内丸山遺跡の地形環境—、「縄文文明の発見」(梅原 猛・安田喜蔵 編) 98-109、P H P研究所、東京。
 柴 正敏 (2009 a)、新田(1)遺跡の堆積物について、新田(1)遺跡報告書、青森県教育委員会。
 柴 正敏 (2009 b)、新田(2)遺跡の堆積物について、新田(2)遺跡報告書、青森県教育委員会。
 水野 裕・堤田報誠 (1982)、土地分類基本調査 (5万分の1)「青森西部」、I 地形分類図、11-15、青森県。

第3節 基本層序 (図4・5)

- 第 I 層 10 YR 3/3** 暗褐色土 表土層である。造成に伴う碎石及び現代の盛土を含む。
- 第 II a 層 10 YR 4/4** 褐色砂 平安時代の包含層であり、沖積地における当該期の遺構検出面である。第2節で述べているように河川由来の層であり、縄文時代の捨て場遺構を覆うように堆積している。土質などから本層を含む3層に細分した。なお、遺構検出面及び遺物の出土層位などで第II層としたものは全て本層を指す。
- 第 II b 層 10 YR 5/4** にぶい黄褐色砂 酸化鉄由来と考えられる暗赤褐色土を中量含む。斜面下方である北西方向に向かって厚く堆積する。
- 第 II c 層 10 YR 5/3** にぶい黄褐色砂 第II層の最下層にあたり、薄い層状をなす。本層から埋没林と考えられる自然木が検出されている。
- 第 III a 層 10 YR 1.7/1** 黒色シルト質土 調査時に第III層としたものである。主に丘陵先端の斜面部に堆積する縄文時代の包含層である。斜面下部では粘土質になる。本来は丘陵上にも堆積していたと考えられるが、削平などによって失われている。捨て場遺構においては、主に縄文時代後期の包含層を上層、中期のそれを下層に細分した。
- 第 III b 層 5 YR 5/2** 灰オリーブ色砂と 10 YR 4/2 灰黄褐色粘土との混合土 I U-34 グリッドを中心とする沖積地に堆積する縄文時代前期の包含層であり、河川由来の層と考えられる。また本層は沖積地における縄文時代の遺構検出面でもある。
- 第 III c 層 5 YR 5/2** 灰オリーブ色砂
- 第 III d 層 10 YR 1.7/1** 黒色土 第III a層の斜面上方からの崩落土と考えられる。このことから丘陵上では縄文時代前期の段階で第III a層が堆積していたと考えられる。
- 第 III e 層 5 YR 5/2** 灰オリーブ色砂 無遺物層。
- 第 IV 層 10 YR 3/3** 暗褐色土 漸移層。削平などにより丘陵先端部に見られるのみである。
- 第 V 層 10 YR 6/8** 明黄褐色ローム 地山。遺構の最終検出面である。
- 第 VI 層 7.5 YR 4/6** 褐色粘土 第V層の下層に堆積する粘土層である。

(葛城)

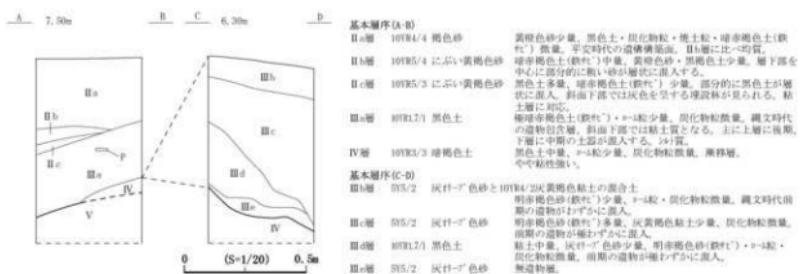


图4 基本层序

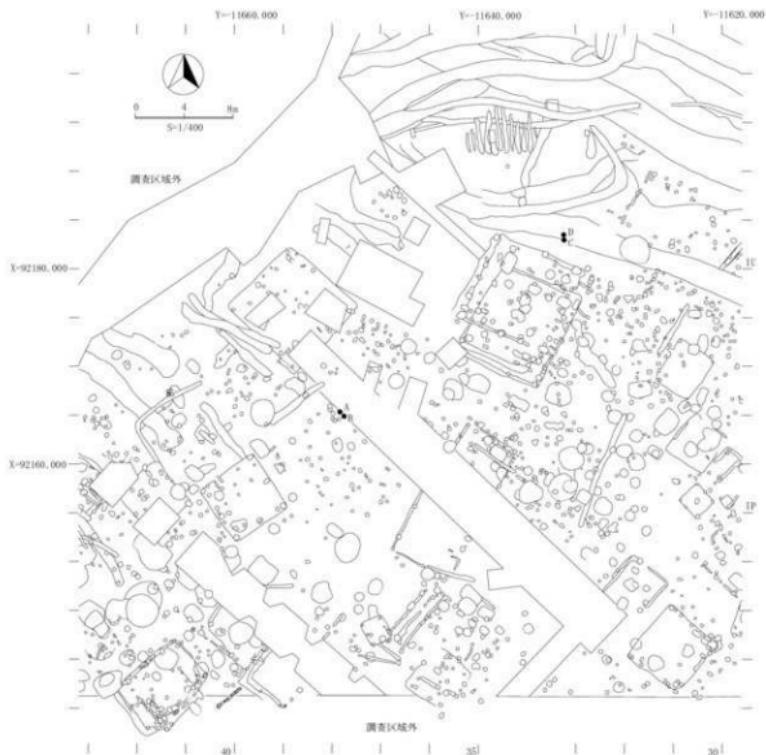


図5 基本順序位置図

第3章 繩文時代の検出遺構と出土遺物

第1節 壁穴住居跡

今回の調査で検出された壁穴住居跡は6軒である。これらは主に調査区西側、標高8m前後の丘陵先端部に分布している。平面形は、不明なものを除き長軸3m前後の円形及び楕円形を呈する。これらの時期は繩文時代前期末葉から後期前葉と考えられ、同時期の遺物が出土した捨て場遺構との関連がうかがえる。炉の形態には、地床炉・土器埋設炉・石囲炉がある。また、調査区南側に隣接する青森市教育委員会調査区でも丘陵先端部から壁穴住居跡が検出されている。以下、各遺構ごとに述べる。

第1号壁穴住居跡（図6）

【位置・確認】 I L-44 グリッドに位置する。第V層上面で黒褐色土のプランとして確認した。第2号壁穴住居跡と重複しているため、北西側が失われている。また、北東側は風倒木によって失われている。

【重複】 第2号壁穴住居跡及び第4号土坑と重複し、本遺構が古い。

【平面形・規模等】 重複などにより詳細は不明であるが、残存する長軸は3.7m、短軸は3.7mであり、楕円形を呈すると考えられる。残存する床面積は8.3 m²である。

【堆積土】 6層に分層した。黒褐色土を主体とし、第2～6層には炭化物を含む。

【壁・床面】 残存する南東壁は緩やかに立ち上がる。壁高は最大50cmである。床面にはやや凹凸がある。また床面及び床面直上からは炭化物が検出されており、焼失家屋と考えられる。

【柱穴】 15基のピットを検出した。主柱穴などは不明である。

【炉】 床面中央やや南東側から石囲炉を1基検出した。規模は長軸1.4m、短軸1.3mである。炉は長方形の自然礫を「コ」字状に配置している。内部からは火床面が検出された。

【出土遺物】 堆積土及び炉から繩文時代前期初頭の表館式、前期末葉の円筒下層d₁～d₂式、中期中葉の円筒上層c～d式、後期前葉の十腰内I式の土器片及び中期～後期にかけての土器片が出土した。6は縦位の条痕文が施される十腰内I式の胴部破片である。10は脚付の石皿破片である。

【小結】 出土遺物及び堆積土の状況から、繩文時代後期前葉・十腰内I式期以降の焼失家屋と考えられる。

（葛城）

第12号壁穴住居跡（図7）

【位置・確認】 I N-41 グリッドを中心位置する。第10号井戸跡を調査後に、半円形の黒褐色土のプランとして確認した。

【重複】 第10号井戸跡及び第41号土坑と重複し、第10号井戸跡より古く、第41号土坑より新しい。ただし、第41号土坑は、本遺構に伴う可能性がある。

【平面形・規模等】 第10号井戸跡との重複により遺構の南半が失われているが、残存する長軸は2.2m、短軸は2.9mであり、楕円形を呈すると考えられる。

【堆積土】 5層に分層した。黒褐色土を主体とし、層中にはローム粒、炭化物粒、焼土粒を含む。

【壁・床面】 南壁は失われているが、残存する壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁高は最大28

cmである。床面はほぼ平坦である。

〔柱穴〕 北東壁から1基検出した。堆積土は黒色土を主体とする。径42cm・深さ29cmである。

〔炉〕 床面ほぼ中央から地床炉を検出した。炉は床面を掘り込んで構築されており、床面からの深さは14cmである。火床面は長軸29cm、短軸21cmの楕円形を呈する。

〔出土遺物〕 堆積土中及び床面から縄文時代前期初頭から後期前葉の土器、磨石が出土している。1は第41号土坑出土土器との接合資料である。口縁部文様帶を区画する貼付にR押圧、胴部には横位のLRがそれぞれ施される。8は沈線文の施される十腰内I式の胴部破片である。

〔小結〕 床面出土遺物から、縄文時代前期末～中期前葉のものと考えられる。

(葛城)

第14号竪穴住居跡（図7）

〔位置・確認〕 I M - 42 グリッドに位置する。第V層上面で壁溝と炉を検出した。斜面に位置するため南側のみが残存していた。

〔平面形・規模等〕 削平により規模は不明であるが、円形を呈すると考えられる。

〔堆積土〕 12層に分層した。黒褐色土を主体とする。

〔壁・床面〕 残存する南壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁高は最大8cmである。床面は地山を掘り下げて第V層をそのまま床面としている。

〔柱穴〕 ピットは3基検出されたが柱穴かどうかは不明である。

〔壁溝〕 住居南側の壁直下を巡る。幅24～31cm、深さ3cmである。

〔炉〕 地床炉を1基検出した。床面を長軸64cm、短軸60cmの不整形に掘り込み、炉としている。被熱範囲は長軸48cm、短軸39cmの隅丸長方形を呈し、5cmの深さまで赤変していた。

〔出土遺物〕 出土遺物は少なく、床面から縄文時代中中期葉・大木10式併行期の土器片が、堆積土から後期前葉・十腰内I式の土器片が出土した。

〔小結〕 出土遺物及び堆積土の状況から、縄文時代中中期葉～後期前葉の可能性がある。

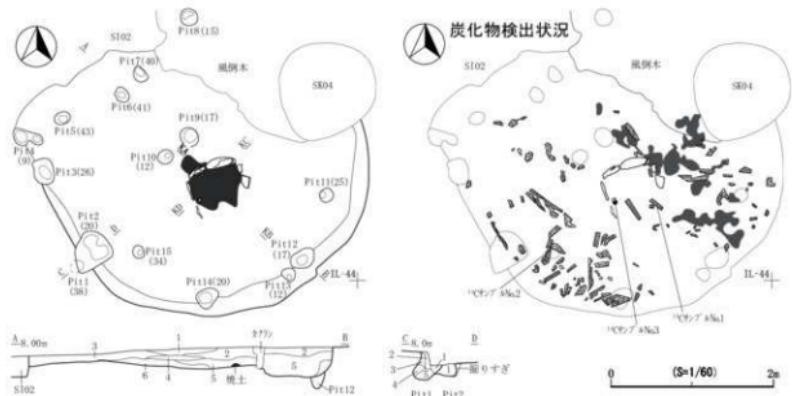
(田中)

第26号竪穴住居跡（図8）

〔位置・確認〕 I M - 37 グリッドに位置する。第V層上面で2基の炉を検出し、これらの精査中に隣接して土器埋設炉がもう1基あることが確認された。本住居跡は丘陵頂部に位置し、周辺は削平されており、炉のみが残存し、壁や床面等は検出されなかつた。1軒の竪穴住居跡の炉の作り替えと考えて調査したが、炉体土器は異なる3時期のものであり、前時代の炉があった場所に新たに炉が作られたことがわかった。

〔平面形・規模等〕 炉のみの検出のため、規模・平面形は不明である。

〔炉〕 3基検出した。炉1は土器片敷炉で、長軸54cm、短軸40cmの楕円形の掘方に褐色土を入れ、その上に土器片を敷設し、炉としている。この炉の北東側にも長軸23cm、短軸18cmの不整楕円形に被熱した部分が検出され、これに伴うものと考えられる。炉に敷設された土器片はすべて同じ個体のもので、接合したところ縄文時代中期中葉・円筒上層e式の深鉢の胴部が復元された。炉2は土器埋設炉で直径30cmの円形の掘方に口縁を打ち欠いた深鉢を設置し、炉としている。炉の最上部には黄褐色土が堆積し、炉1を作る際に埋め戻されたと考えられる。炉3も土器埋設炉で、直径23cmの円形



第1号竪穴住居跡

- 1層 10YR2/1 黒色土・植生付・柱穴数個。
 - 2層 10YR2/2 黑褐色土・柱穴数個。
 - 3層 10YR2/3 黑褐色土・柱穴数個。
 - 4層 10YR3/2 黄褐色土上中層・灰土灰少量。炭化物軽微量。
 - 5層 10YR3/3 黄褐色土・柱穴数個。
 - 6層 10YR2/1 黑褐色土・柱穴数個。
 - 7層 10YR2/2 黑褐色土・柱穴数個。
- 第1号竪穴住居跡P1:**
- 1層 10YR2/1 黑褐色土・柱穴数個。
 - 2層 10YR2/2 黑褐色土・柱穴数個。
 - 3層 10YR2/3 黄褐色土+10YR3/2の混合土。
 - 4層 10YR2/1 黑褐色土・柱穴数個。

第1号竪穴住居跡P1:

- 1層 10YR2/1 黑褐色土+10YR3/3 増加土の混合土。→-3中量、→-4輕少量。
- 2層 10YR2/2 黑褐色土・柱穴数個。
- 3層 10YR2/3 黄褐色土・柱穴数個。
- 4層 10YR2/2 黑褐色土・柱穴数個。
- 5層 10YR2/1 黑褐色土・柱穴数個。
- 6層 10YR2/1 黑褐色土・柱穴数個。
- 7層 10YR2/2 黑褐色土・柱穴数個。
- 8層 10YR2/2 黑褐色土・柱穴数個。
- 9層 10YR2/2 黑褐色土・柱穴数個。
- 10層 10YR2/2 黑褐色土・柱穴数個。

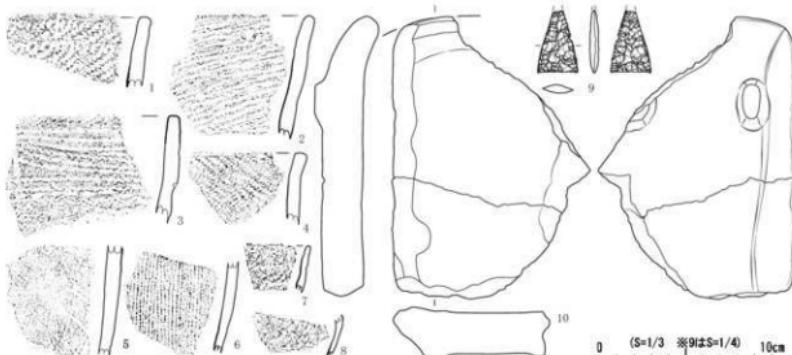
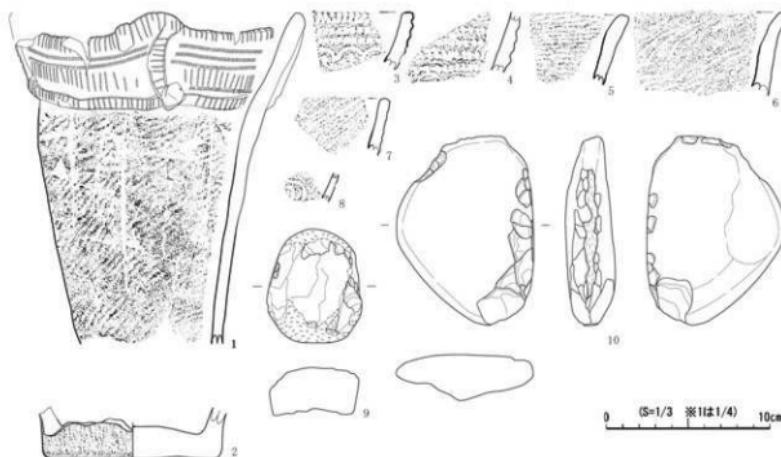
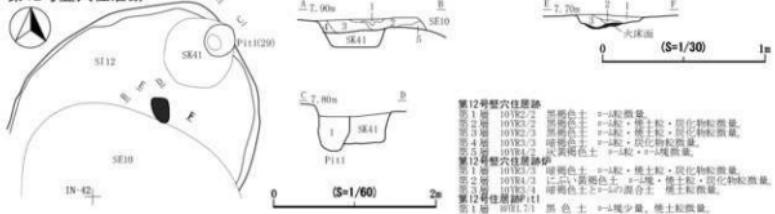
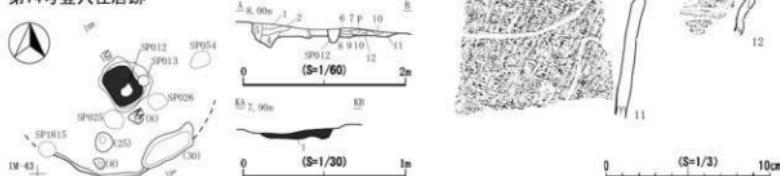


図6 第1号竪穴住居跡

第12号竪穴住居跡



第14号竪穴住居跡



第14号竪穴住居跡

1. 10V32/2 黑褐色土 x-1粒少量。
2. 10V32/6 黑褐色土 x-1粒。壤土粒・炭化物粒微量。
3. 10V32/2 黑褐色土 x-1粒。壤土粒・炭化物粒微量。
4. 10V32/2 黑褐色土 x-1粒。壤土粒・炭化物粒微量。
5. 10V32/2 黑褐色土 x-1粒。壤土粒・炭化物粒微量。
6. 10V32/2 黑褐色土 x-1粒。壤土粒・炭化物粒微量。
7. 10V32/3 黑褐色土 x-1粒。壤土粒・炭化物粒微量。
8. 10V32/3 黑褐色土 x-1粒。壤土粒・炭化物粒微量。
9. 10V32/3 黑褐色土 x-1粒。壤土粒・炭化物粒微量。
10. 10V32/3 黑褐色土 x-1粒。壤土粒・炭化物粒微量。
11. 10V32/3 黑褐色土 x-1粒。壤土粒・炭化物粒微量。
12. 10V32/3 黑褐色土 x-1粒。壤土粒・炭化物粒微量。

第14号竪穴住居跡

1. 10V32/3 棕褐色土 黑褐色土・炭化物粒微量。

图7 第12·14号竪穴住居跡

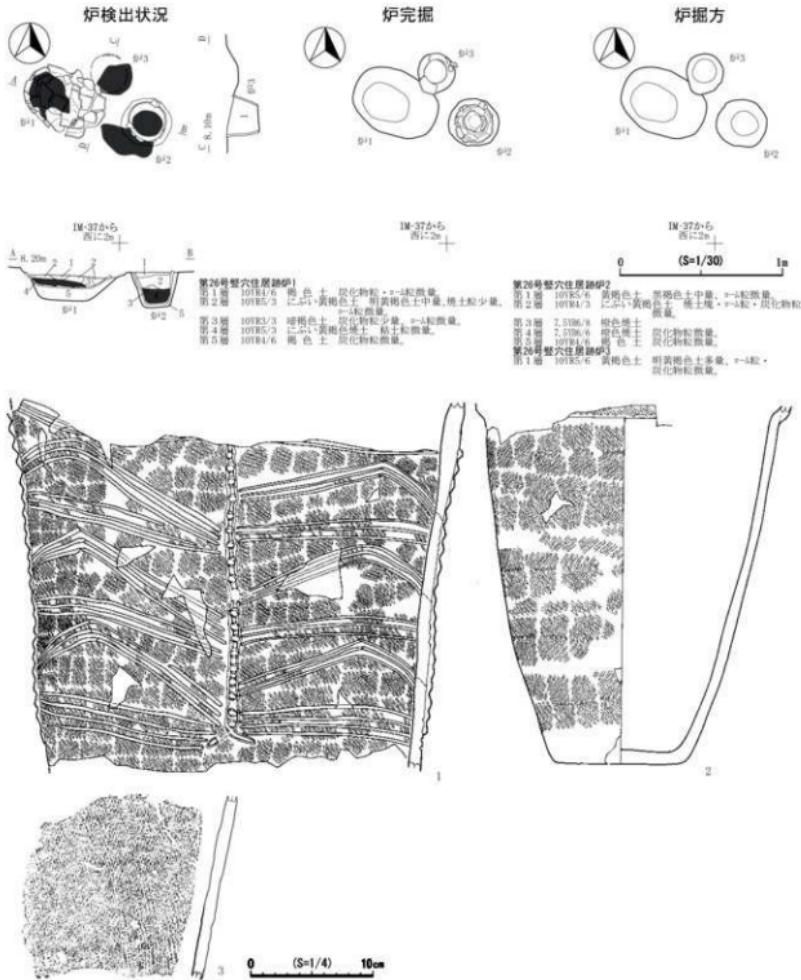


図8 第26号竪穴住居跡

の掘方に土器を埋設し、炉としたと考えられるが、炉体土器は破片しか残存しておらず、炉2を構築する際に土器を抜き取り埋め戻したと考えられる。炉3は明褐色土で埋め戻されており、焼土も検出されなかった。

【出土遺物】1は炉1に敷設された土器片を接合したもの、2は炉2の炉体土器、3は炉3の炉体土器で

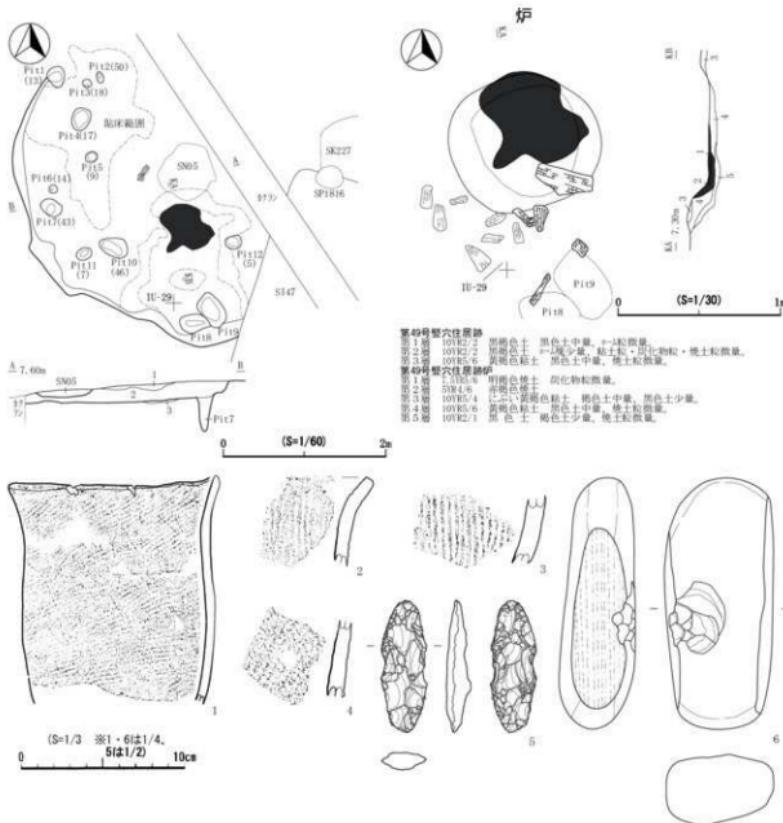


図9 第49号竪穴住居跡

ある。1は縄文時代中期中葉・円筒上層e式の深鉢の胴部である。縦位の隆帯の左右に3~4条の横位の沈線と山形の沈線を組み合わせた三角形状の文様が施文されている。2は口縁部を欠失しており、胴部には結節第一種の羽状縄文が施文される。中期前葉・円筒上層a~c式期と考えられる。3は胴部に単軸絡条体を斜め方向に施文しており、前期末葉・円筒下層d式に比定される。

〔小結〕 炉1は縄文時代中期中葉・円筒上層e式期、2は中期前葉・円筒上層a~c式期、炉3は前期末葉・円筒下層d式期のもので、各炉には時間差があり、古い時期の炉3を埋めて炉2を構築し、さらにこれを埋め戻して炉1を構築したと考えられる。

(田中)

第49号竪穴住居跡（図9）

〔位置・確認〕 IU-29グリッドを中心に位置する。第V層上面で黒褐色土の円形のプランを確認

した。斜面に位置するため斜面下位の住居北東側は検出されなかつた。

〔重複〕 第5号焼土跡と重複し、本住居跡が古い。平安時代の第47号竪穴住居跡とも重複する。

〔平面形・規模等〕 西側のみの検出のため規模は不明であるが、円形を呈すると考えられる。残存する床面積は7.2m²である。

〔堆積土〕 3層に分層した。黒褐色土を主体とし、炭化物と焼土が混入する。

〔壁・床面〕 壁はやや外傾しながら立ち上がる。壁高は最大40cmである。床面は第V層を床面とするが、住居北西側と炉の周辺には粘土が貼られている。

〔柱穴〕 ピットは12基検出され、このうち壁際に位置するピット1・7～9・11が壁柱穴と考えられる。径16～43cmの円形あるいは楕円形で、深さは7～17cmである。

〔炉〕 住居南側に1基検出した。地床炉で、床面を長軸92cm、短軸83cmの楕円形に掘り込み、粘土を貼って炉としている。被然範囲は長軸65cm、短軸62cmの不整形を呈し、深さ4cmまで赤変している。

〔出土遺物〕 繩文時代前期末葉・円筒下層d式の土器片と中期末葉～後期前葉の土器が出土している。1は堆積土から出土した中期末葉・大木10式併行期の深鉢である。本住居跡と重複する第5号焼土跡出土の破片と接合した。頸部がややくびれ、口縁部が緩やかに外傾する器形である。平縁でLRが施文される。2・3は床面直上から出土しており、2は後期前葉、3・4は前期末葉・円筒下層d式に比定される。5は堆積土から出土した石槍である。長さ8.8cmで、中央部に浅い抉りがみられる。

〔小結〕 出土遺物及び堆積土の状況から、繩文時代中期末葉～後期前葉の可能性がある。 (田中)

第50号竪穴住居跡（図10）

〔位置・確認〕 I S-29グリッドを中心に位置する。第V層上面で、第41号竪穴建物跡と重複する半円形の黒褐色土のプランとして確認した。

〔重複〕 第41号竪穴建物跡と重複し、本遺構が古い。

〔平面形・規模等〕 平面形は、長軸3.6m、短軸3.1mの楕円形を呈する。床面積は7.0m²である。

〔堆積土〕 8層に分層した。黒褐色土を主体とする。層中には軽石や粘土塊が多く含まれており、人为堆積の可能性が高い。

〔壁・床面〕 壁はやや外傾しながら立ち上がる。壁高は最大53cmである。床面は第VI層を掘り込んで構築されており、ほぼ平坦である。土器埋設炉を中心して硬化面が検出されている。

〔柱穴〕 6基検出された。いずれも浅く、主柱穴とは考えられない。

〔炉〕 床面ほぼ中央から土器埋設炉を1基検出した。第1層直下から底部が出土している。明確な火床面は検出されなかつたが、出土位置及び形態から炉と判断した。

〔その他の施設〕 南壁ほぼ中央から、周堤を伴う特殊施設を検出した。周堤は「ハ」の字状を呈しており、第VI層を母材とする粘土で構築されている。内部は若干ではあるがくぼんでおり、深さ23cmの楕円形のピットと、深さ7～9cmの小ピットが2基検出された。用途などは不明である。

〔出土遺物〕 堆積土中から、繩文時代前期前葉及び中期前葉の土器片が出土している。1・2は円筒上層c式の炉体土器である。口縁部に刺突及びLRとRLの押圧が、胴部には結束第一種がそれぞれ施される。

〔小結〕 炉体土器から、繩文時代中期前葉・円筒上層c式期のものと考えられる。

(葛城)

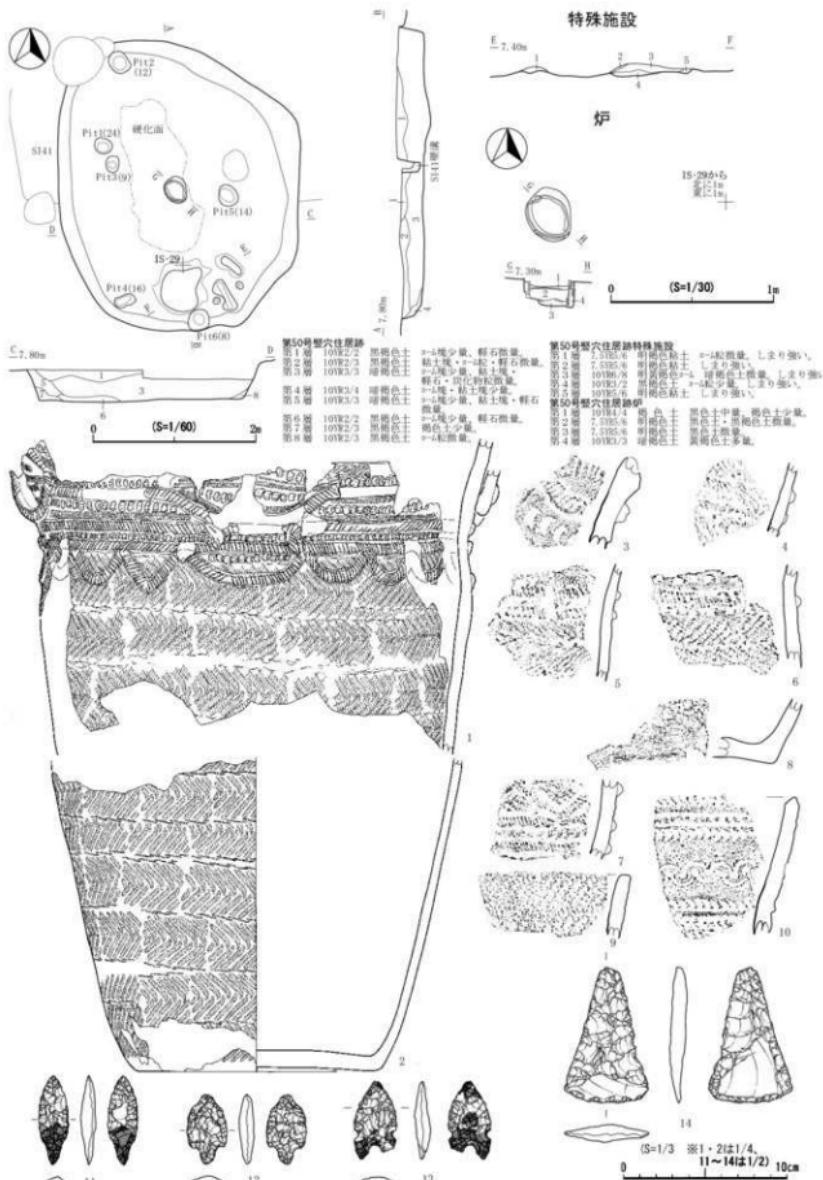


图10 第50号竖穴住居跡

第2節 土坑（図11～19）

今回の調査で検出された繩文時代の土坑は38基である。ここでは個別の記載は行わず、概要のみを述べる。個々の遺構の計測値などについては遺構一覧表を参照されたい。

繩文時代の土坑は沖積地から検出されたもの（第247・248号土坑）を除き、標高約7～8m前後の丘陵先端部に分布し、丘陵上にはほとんど見られない。また、I T - 26グリッドを中心とする調査区東側とI N - 40グリッドを中心とする南西側の2ヶ所に分布のまとまりが見られるが、特にI N - 40グリッドを中心とするまとまりには全体の約半数弱にあたる17基が分布する。これらの大半は地山である第V層で検出されたが、第Ⅲb層で検出されたもの（第247・248号土坑）や、他遺構との重複により第VI層で検出されたもの（第96号土坑）もある。

平面形は、円形（第17・18・22・34・41・68・80・120・193・200・204・214・233号土坑）・稍円形（第5・10・23・24・79・96・247・248号土坑）となる円形基調のものが21基、方形（第164号土坑）、隅丸方形（第44・228・235・249号土坑）、長方形（第40・66・250号土坑）となる方形基調のものが8基、不整形（第28・83・90・115・150号土坑）が5基、また他遺構との重複や搅乱などにより平面形が判然としないもの（第37・42・110・245号土坑）が4基である。規模は長軸が66～249cmで平均134cm、短軸は18～221cmで平均108cmである。平面形と長軸の長さとの関係を見ると、円形基調のものの長軸平均117cmに対して、方形基調のもののそれは162cmとなる。サンプル数が少なくややばらつきも見られるが、方形基調の方が大型である傾向がある。

断面形は、底面から開口部に向かって緩やかに外傾しながら立ち上がるもの（第5・17・24・34・37・40～42・44・68・79・83・90・150・247・248号土坑）、ほぼ垂直に立ち上がるもの（第80・164・200号土坑）、底面からほぼ垂直に立ち上がり、そこから屈曲して開口部に向けて外傾するもの（第10号土坑）、プラスコ状を呈するもの（第18・22・23・28・66・96・110・115・120・193・204・214・228・233・235・245・249・250号土坑）がある。深さは14～114cm、平均54cmで、断面形と深さに明瞭な相関関係は見られない。これは平面形と深さについても同様である。

底面は平坦なものが多いが、中には底面中央に小ビットをもつもの（第164・228号土坑）、ビット状のくぼみをもつもの（第17・37・40号土坑）、横穴状の掘り込みをもつもの（第34号土坑）がある。底面中央に小ビットをもつものについては、この小ビットに逆茂木を設置した可能性がある。

堆積土は、第Ⅲ層起源と考えられる黒色土及び黒褐色土を主体とするものが多いが、中には第V層起源と考えられる黄褐色ロームを主体とするものもある。これらの堆積土中にはロームや焼土粒、炭化物などが含まれ、人為堆積と考えられるものが多い。またプラスコ状を呈するものの中には、壁面の崩落土と考えられるロームが堆積するもの（第28号土坑）や、底面直上に白色粘土が堆積するもの（第120号土坑）もある。

遺物は繩文時代前期初頭～後期前葉にかけての土器、石器が出土している。中でも沈線文を主体とする後期前葉・十腰内I式土器の出土量が多く、底面から復元個体が出土しているもの（第23・28・34・44号土坑）もある。他には、ループ文やコンバス文が施され、前期初頭に比定されるもの（図16-14・22・23、図18-13など）、胎土に纖維を含み、単軸絡条体1類が施される前期前葉の深郷田式に比定されるもの（図15-3・7・12・20など）、多軸絡条体が施され、前期末葉の円筒下層d式に比定されるもの（図17-27・33）、粘土紐の貼付が盛行する中期前葉の一群（図17

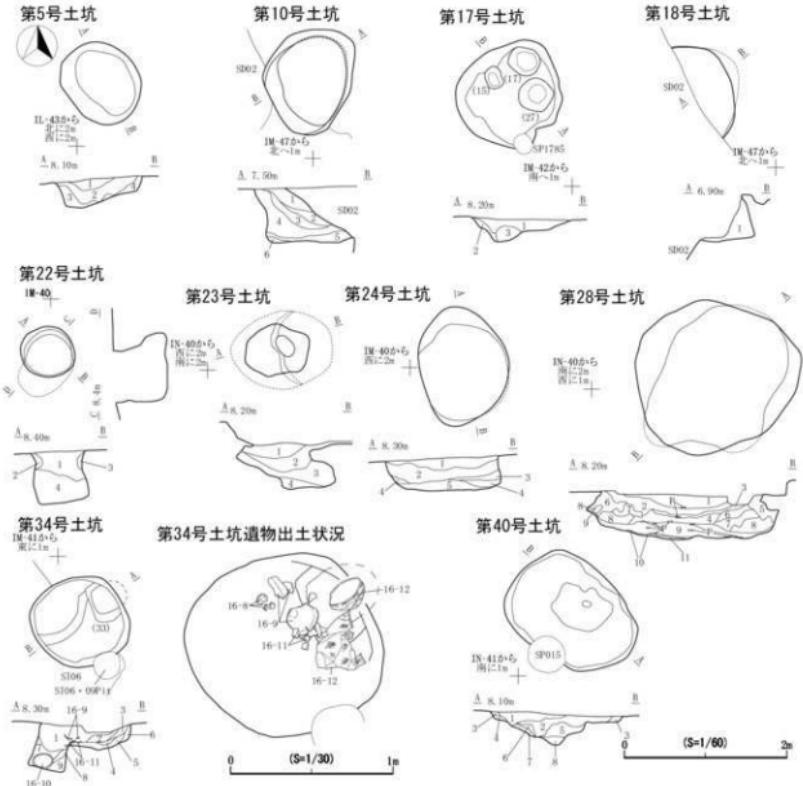


図11 繩文時代の土坑(1)

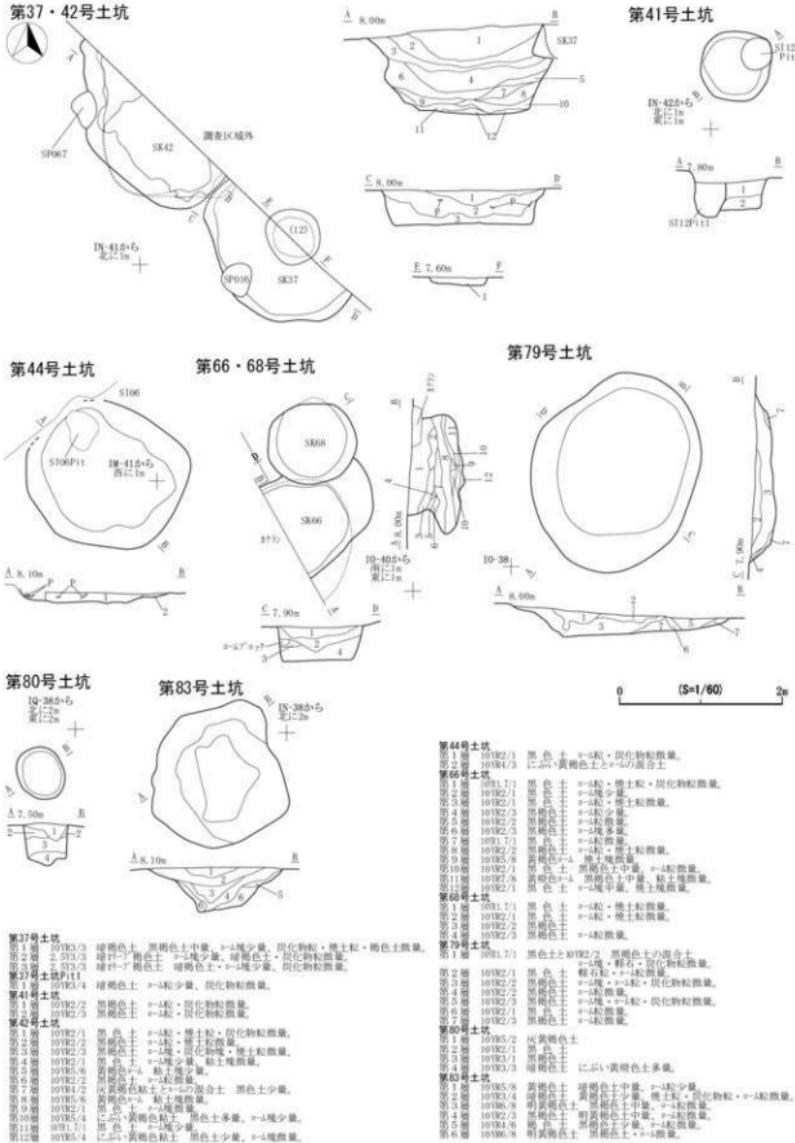


図12 縄文時代の土坑(2)

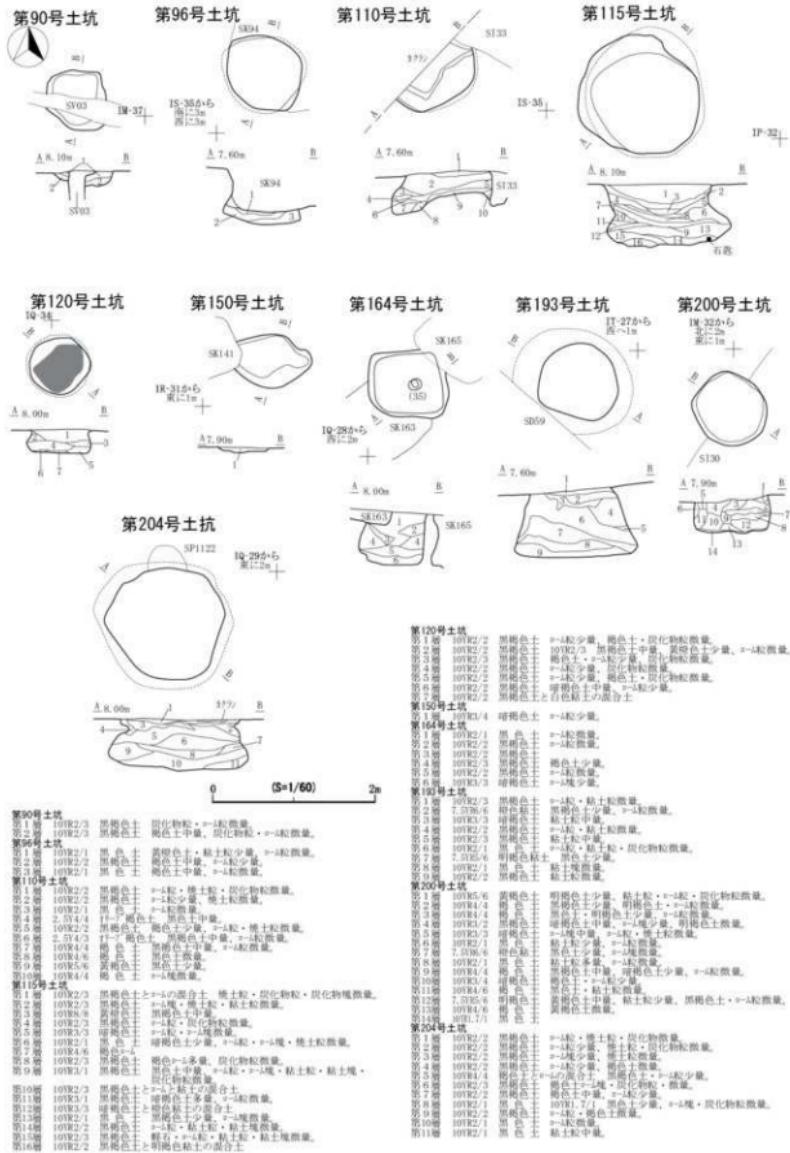


図13 繩文時代の土坑(3)

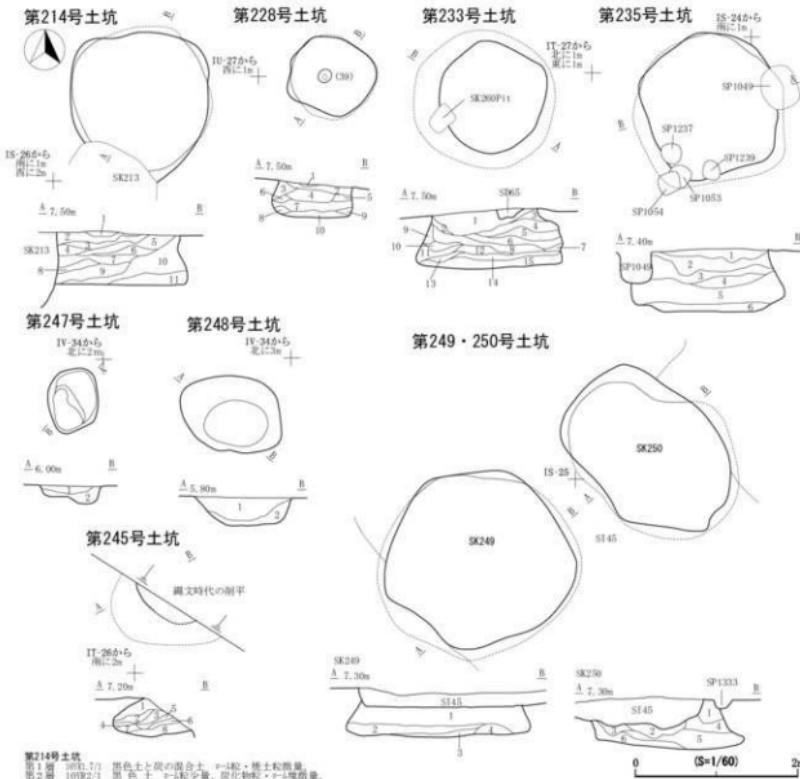


図14 繩文時代の土坑(4)

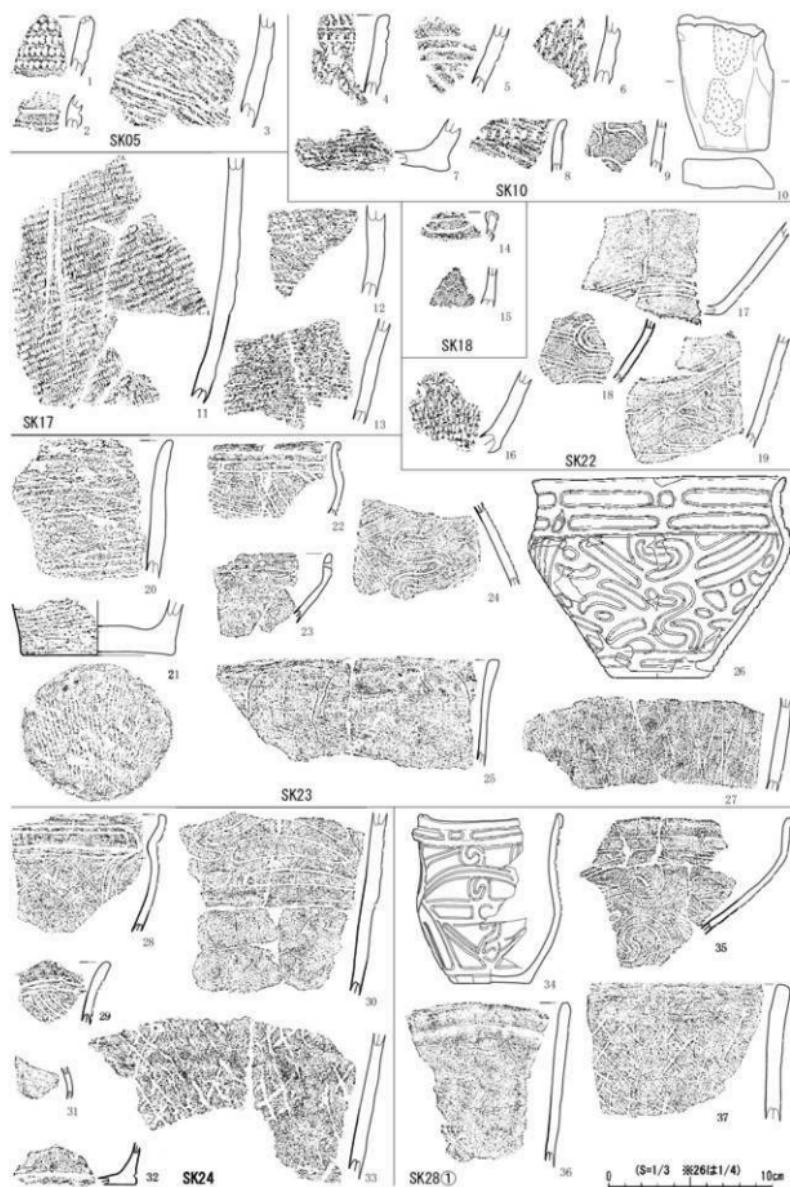


図15 繩文時代の土坑出土遺物(1)

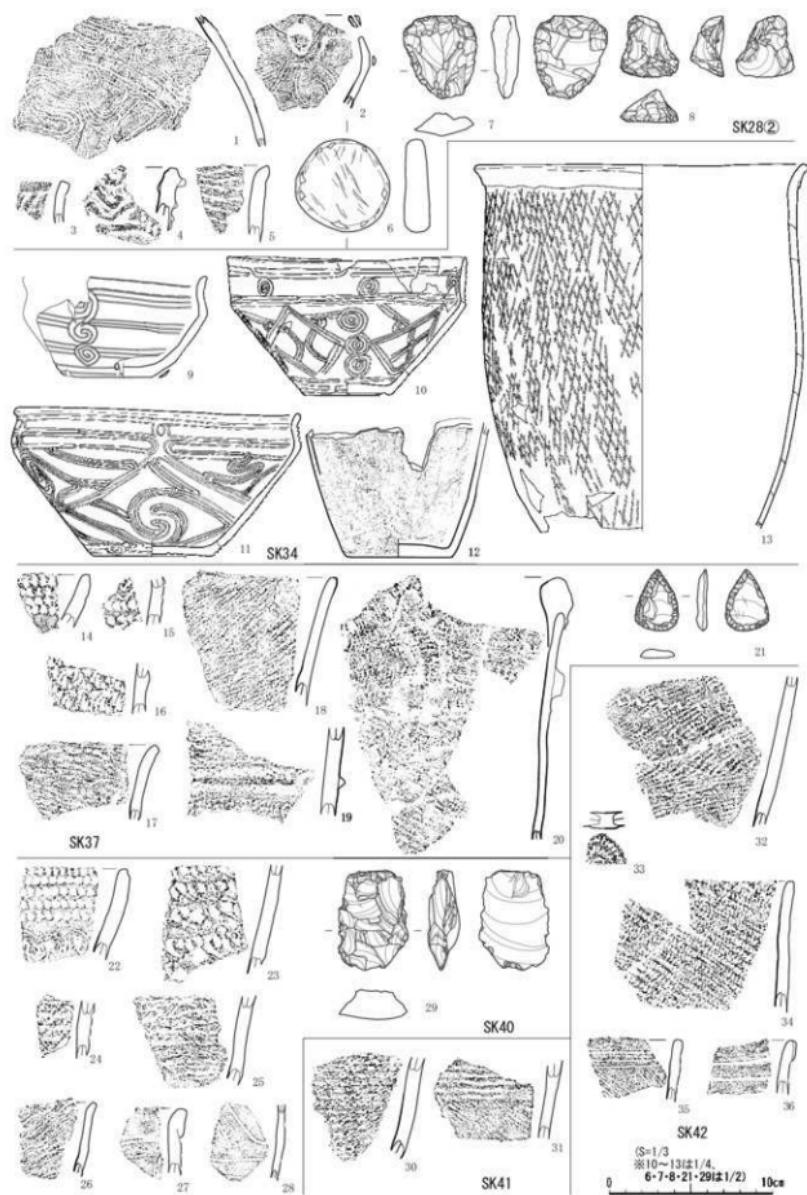


図16 繩文時代の土坑出土遺物(2)

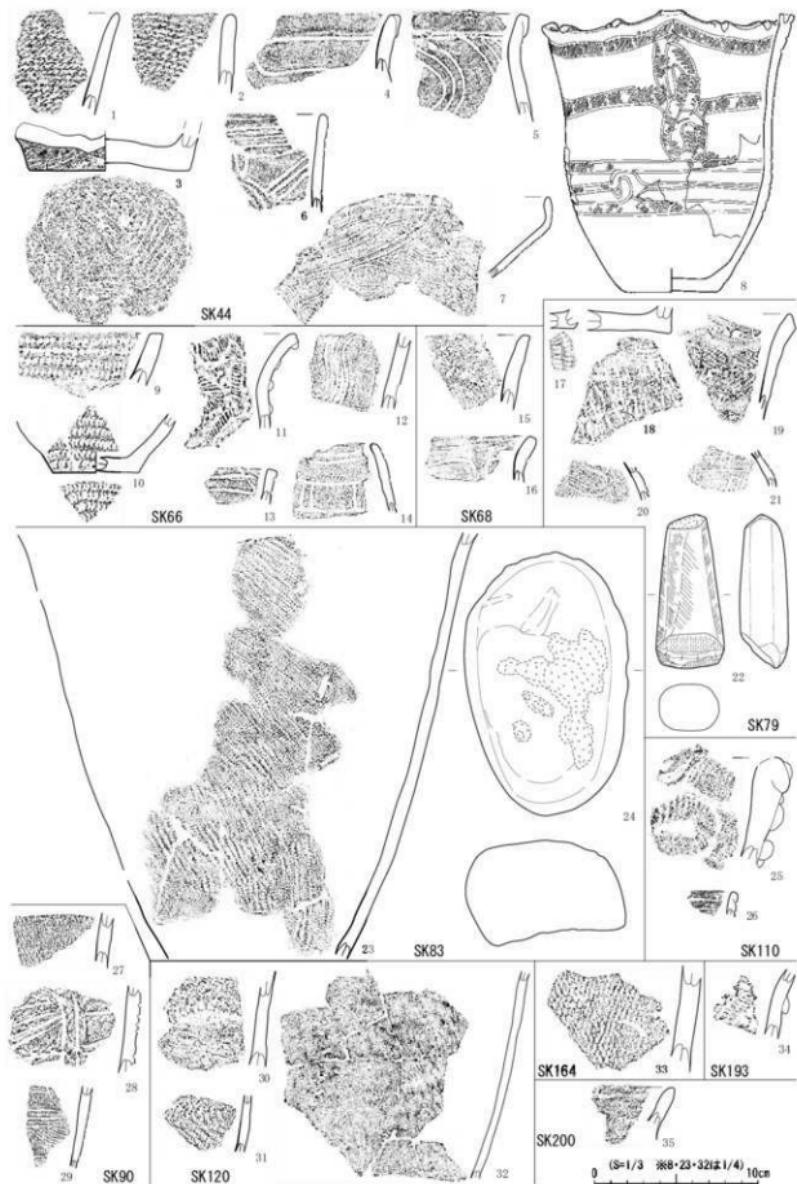


図17 繩文時代の土坑出土遺物(3)

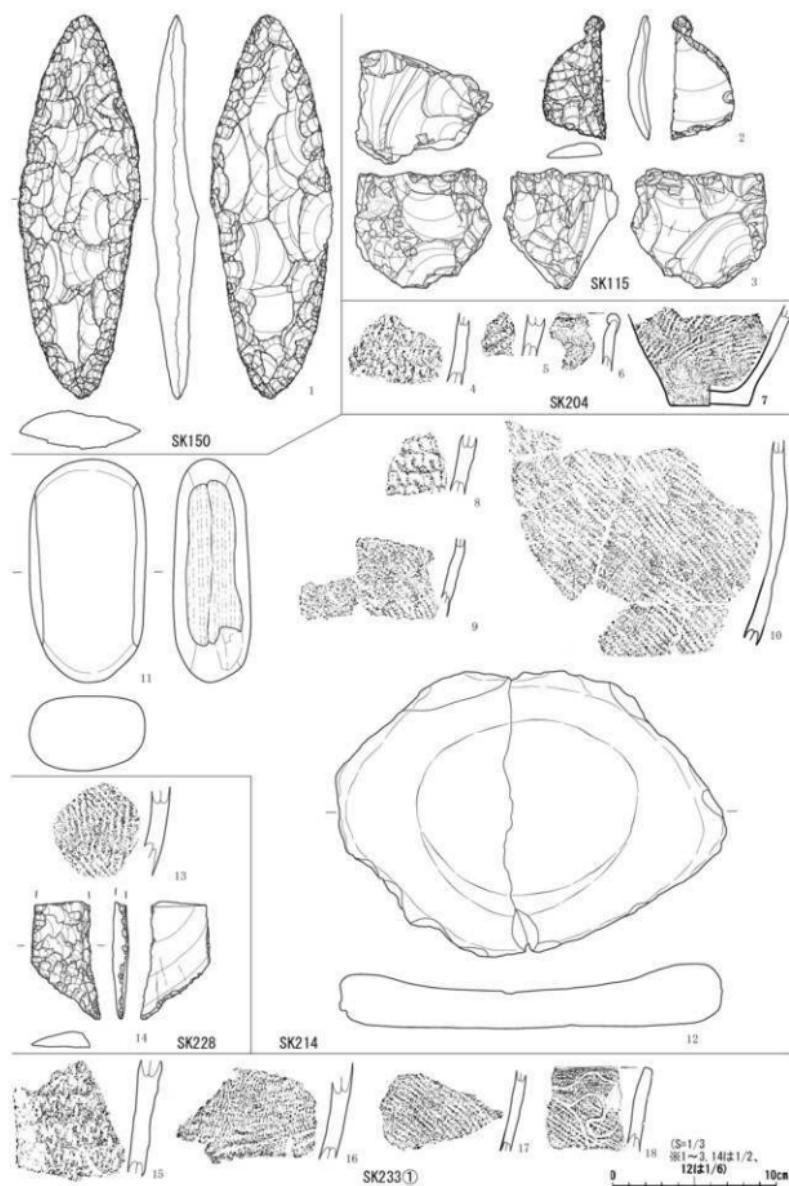


図18 純文時代の土坑出土遺物(4)

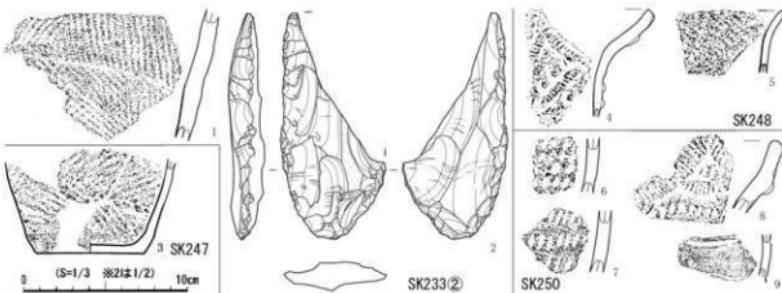


図19 繩文時代の土坑出土遺物(5)

—11・34、図19-4・8など)、磨消しが施される中期末葉の大木10式併行のもの(図18-18)などが出土した。器形は深鉢が大半を占めるほか、浅鉢、鉢、壺、ミニチュア土器が見られる。石器では、石鏃、石匙、スクレイパー類、石槍、敲磨器類がある。また第214号土坑からは大型の石皿も出土しているが、これらの出土点数は土器に比べ少ない。

出土土器を指標に土坑を時期別に分類すると、前期初頭のもの2基(第83・228号土坑)、前期前葉のもの1基(第41号土坑)、末葉のもの1基(第164号土坑)、中期前葉のもの3基(第37・193・248号土坑)、前半のもの1基(第247号土坑)、後葉のもの1基(第17号土坑)、末葉のもの1基(第233号土坑)、中期末葉～後期のもの1基(第214号土坑)、後期前葉のもの19基(第5・10・18・22～24・28・34・40・42・44・66・68・79・90・110・200・204・250号土坑)、後期のもの1基(第120号土坑)、時期不明のもの7基(第80・96・115・150・235・245・249号土坑)となる。このうち中期では、標高約6mの低地に隣り合って分布する第247・248号土坑が特筆される。出土遺物から、前者は中期前葉・円筒上層式期、後者は中期前葉・円筒上層b式期のものと考えられる。両遺構の堆積土はいずれも粘土質であり、一部湧水も見られる。これらの南側にはほぼ同時期の捨て場遺構が形成されている。このことから、捨て場遺構の形成とほぼ同時に、低地において土坑の構築、利用がなされていたと考えられる。後期前葉の一群は調査区西側1N-40グリッド付近にまとまりが見られる。周辺には同時期の竪穴住居跡が分布していることから、これらに伴う可能性が高い。また、これらの西側には捨て場遺構が形成されている。

用途については明らかにできなかったものがほとんどである。底面に小ビットをもつ第164・228号土坑は落とし穴の可能性がある。第150号土坑は底面直上から石槍が出土しており、墓の可能性が考えられるが、他の遺物が出土せず、また遺構の上半が失われているため詳細は不明である。

本遺構群は、調査の結果縄文時代前期初頭から後期前葉にかけてのものであることが判明した。特に後期前葉のものが多い。これらは時期を問わず、丘陵先端部に主に分布していることが大きな特徴である。また、縄文時代中期前葉と後期前葉の一群は、同時期のものと考えられる竪穴住居跡及び捨て場遺構にそれぞれ伴うと考えられる。しかし本遺構群を含め、縄文時代の遺構は調査区南側に隣接する青森市教育委員会調査区へと広がっている。このため集落全体の議論はその時間幅も含め、その調査成果を踏まえた上で行う必要がある。

(葛城)

第3節 溝状土坑（図20・21）

溝状土坑は10基検出された。溝状土坑は、その形態から落とし穴（Tピット）と考えられている。標高7～8mの丘陵先端部付近に位置し、調査区中央やや南西寄りのIM・N-36～38グリッド付近や、調査区東側IM-26グリッド付近に分布する。2～3基がまとまって検出されるが、単独で確認されるものもある。中には削平によって搅乱され、全体形が判断できないものもある（第2・9号溝状土坑）。

他遺構との重複関係は、第7号溝状土坑が他遺構との重複が認められないものの、他はすべて重複する。第3号溝状土坑は繩文時代のものである第90号土坑より新しいが、他はすべて古い。

規模は、開口部の長軸は333～410cmで平均375cmとなり、短軸は16～35cmで平均27cm、検出面からの深さは43～105cmで平均84cmである。長軸・短軸・深さが共に最小のものは第10号溝状土坑で、最大となるものは、それぞれ長軸が第5号溝状土坑、短軸と深さが第8号溝状土坑である。

開口部は直線的に伸びる細長い平面形となるが、中には東端部に張り出し部が形成されるものもある（第3号溝状土坑）。短軸方向の断面形は、壁面が直立気味になるU字状のものが主となる。中には壁面中腹から外傾し、Y字状となるもの（第1・7号溝状土坑）や、底面直上から外反し、V字状となるもの（第2号溝状土坑）がある。長軸方向の断面形は、そのほとんどが両端が外側に張り出す形態となる。例外として、底面がすぼまる形態となるもの（第3号溝状土坑）、西側の壁面がほぼ直立する形態のものがある（第8号溝状土坑）。底面は平坦気味のものが大半を占めるが、中には起伏が激しいもの（第9号溝状土坑）もある。他には、底面中央付近でやや窪むもの（第6号溝状土坑）、傾斜しているもの（第1号溝状土坑）もみられる。

堆積土はほとんどが黒～黒褐色土主体で、ほぼ例外なくローム粒が混入している。堆積状況から概ね自然堆積と考えられる。第6号溝状土坑の第2・3層は主体層とロームとが互層となって堆積している。また、第1・3・4・6号溝状土坑の層下半には、壁の崩落土と思われるローム主体層が認められる。

主軸方位は、西方主体のものが6基（第1・3～5・8・10号溝状土坑）、東方主体のものが4基（第2・6・7・9号溝状土坑）となる。ややばらつきはあるものの、第3・4・8号溝状土坑の3基はN-75°-Wあたりにまとまりがみられる。主軸方位は、ほとんどが丘陵先端部の緩斜面に直交気味となる。

遺物は繩文土器片と石鏃が出土している。土器は前期初頭の表館・早稲田式（図21-3・8）、前期前葉の深郷田式（図21-2・5・14）、前期末葉の円筒下層d式（図21-17）、中期前葉の円筒上層b～c式（図21-15）、中期中葉の円筒上層d～e式（図21-9）、後期前葉の十腰内I式（図21-4・6・7など）にそれぞれ相当すると考えられる。沈線文や磨消しなどが施される十腰内I式が出土土器の大半を占めており、器種は浅鉢と考えられる小破片（図21-4）を除き、すべて深鉢である。

本遺構群は、出土遺物や堆積土、他の遺構との重複関係から繩文時代前期前葉～後期前葉のものと考えられる。

（平山）

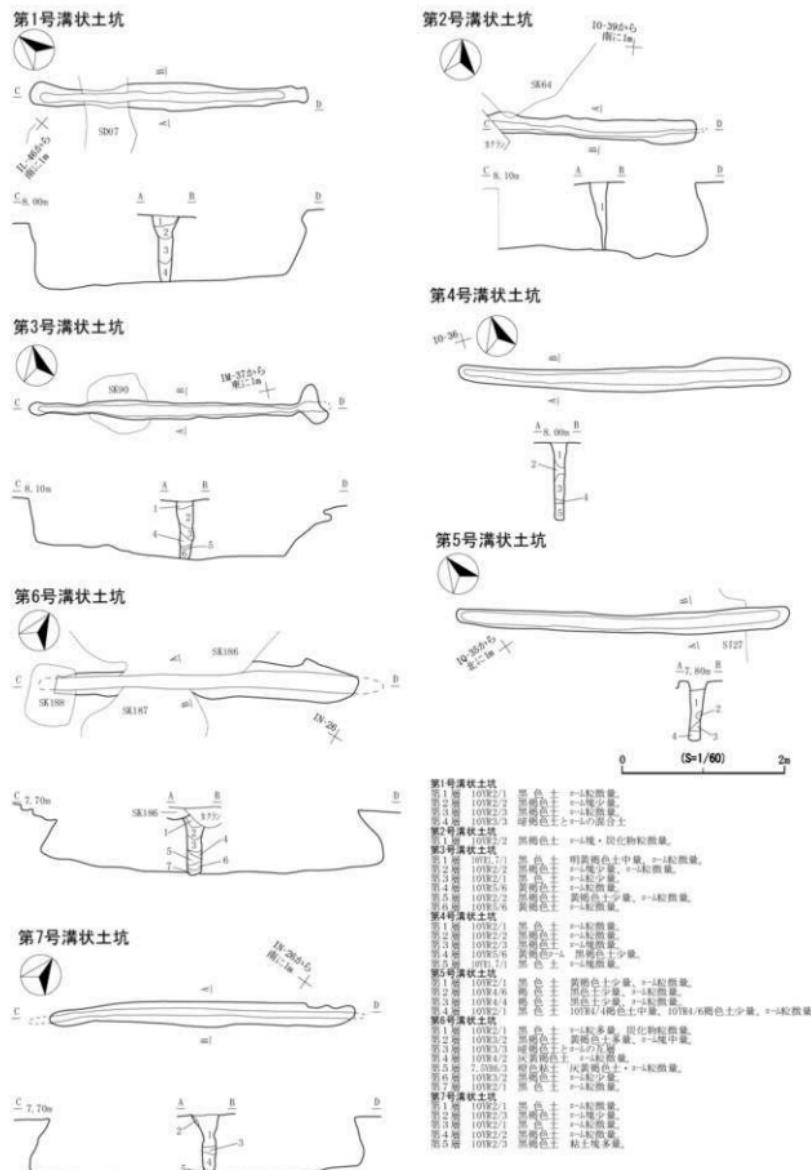


图20 溝状土坑(1)

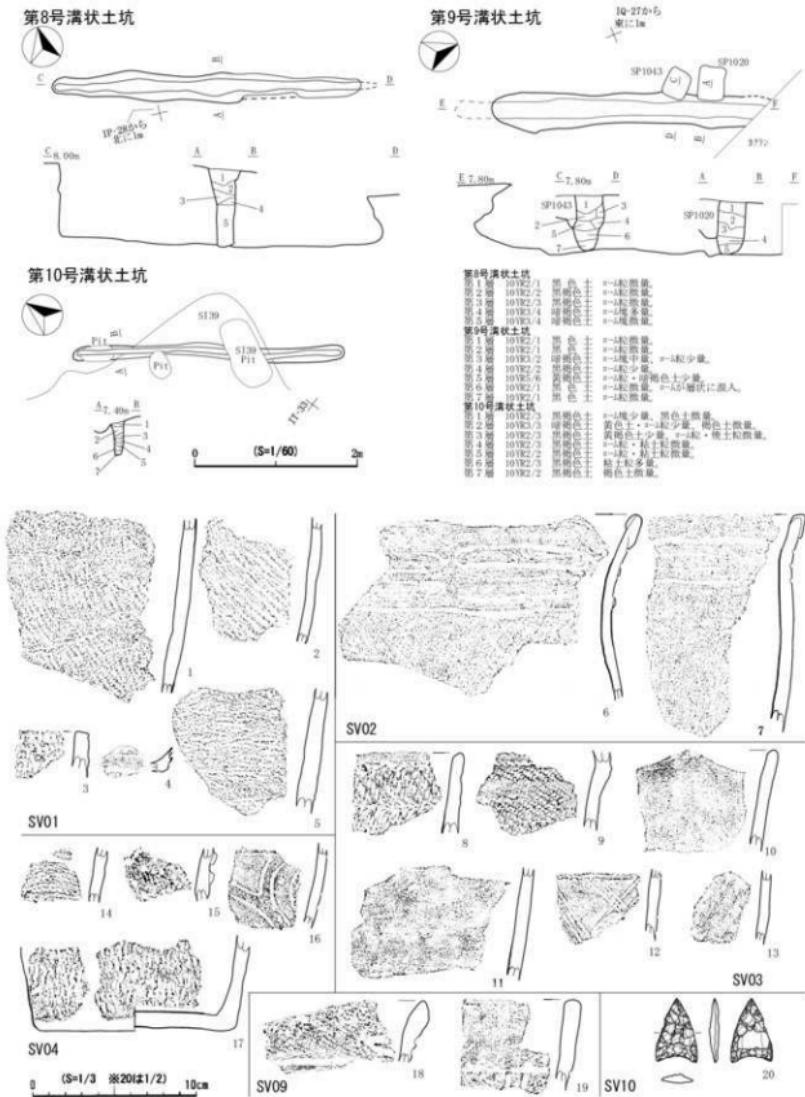


図21 溝状土坑(2)

第4節 土器埋設遺構（図22）

土器埋設遺構は、調査区中央の東寄り I T - 31 グリッドから 2 基検出された。標高は 7.6m で、周囲は土地造成によって削平されており、両遺構は大部分が破壊された状態であった。

第1・2号土器埋設遺構は共に深鉢が正位に埋設されているが、土器自体も削平によって破損しており、第1号土器埋設遺構の深鉢(1)については、底部が残存するのみであった。第2号土器埋設遺構は、埋設された底部を欠く深鉢(2)の下面から、それとは別個体である深鉢の破片(3)がまとまって出土している。3は、横位に出土しており、土器の底面として意図的に埋設された可能性がある。

遺構の掘方は、第1号土器埋設遺構は長軸 60cm、短軸 52cm の判然としない楕円形状のプランで、深さは 11cm となり、第2号土器埋設遺構は径 38cm の円形のプランで、深さは 27cm である。堆積土は両遺構とも黄褐色～黒褐色土の混合土が主となり、焼土粒・炭化物粒が混入する。遺構の掘方及び埋設土器内からは、他の遺物は出土していない。

出土土器は、3点とも地文が結束第一種（RL・LR）で、第2号土器埋設遺構のものについては、胴部上部に粘土紐が貼り付けられ、Lの押圧が施される。土器はすべて縄文時代中期に相当し、第1号土器埋設遺構出土土器は円筒上層式、第2号土器埋設遺構出土土器は円筒上層d式である。

(澤田)

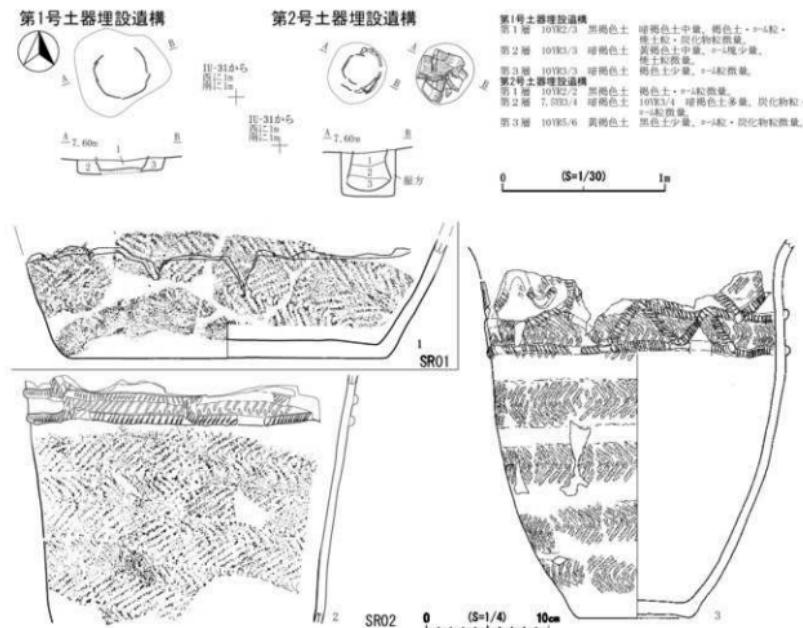


図22 土器埋設遺構

第5節 焼土遺構（図23）

焼土遺構は、調査区中央やや西寄りのI Q - 39 グリッドと東側のI U - 29 グリッドから計2基検出された。両遺構は、標高7.5~7.6mの丘陵部から沖積地へ下る緩斜面付近に位置しており、第3号焼土遺構は第Ⅲ層を精査中に、第5号焼土遺構は第49号竪穴住居跡の堆積土上でそれぞれ確認された。

第3号焼土遺構は長軸107cm、短軸38cmの判然としないプランであり、焼土の厚さは15cmである。堆積状況や土色から廃棄された可能性が考えられる。第5号焼土遺構は、直径70cmの円形のプランであり、焼土の厚さは11cmである。第5号焼土遺構は、繩文時代の第49号竪穴住居跡の堆積土を掘り込むように形成されており、本遺構が新しいと判断できる。

両遺構内からは遺物が出土していないため時期の判断は困難だが、検出状況や他遺構との重複関係などから繩文時代のものと考えられる。
(澤田)



図23 繩文時代の焼土遺構

第6節 捨て場遺構（図24～56）

捨て場遺構は、調査区西側の標高6~7mの斜面部及び低地に位置する。今回捨て場遺構としたのは、おおよそ I V - 31 ~ I M - 47 グリッドの範囲で、新城川に面した丘陵先端の斜面部にあたる。

繩文時代の遺物包含層である第Ⅲ層は、漸移層及びローム層である第Ⅳ・V層と平安時代の包含層である第Ⅱ層に挟まれる形で丘陵先端部において帶状に検出された。また第Ⅱ層を掘り込む平安時代の遺構の中には、この第Ⅲ層まで掘り込んでいるものがあり、そこから繩文土器が出土するものもあった。そこで試掘トレンチを設定して第Ⅲ層の堆積状況を確認した結果、丘陵先端部で帶状に検出された地点から、西側に傾斜しながら第Ⅱ層の下に潜り込むように堆積していることが判明した。このため第Ⅱ層の調査終了後、重機で第Ⅱ層を除去し第Ⅲ層の調査を行った。その結果、繩文時代前期から晩期にかけての多量の土器、石器、土製品、石製品などが出土し、捨て場遺構として調査を行った。第Ⅲ層は分層することは困難であったが、捨て場北側の一部では大きく上層、下層に分層して遺物の取り上げを行った。

捨て場遺構から出土した土器の総重量は約893kg、剥片石器は約9kgである。各グリッドにおける土器の重量分布を見ると、I U・V - 33・34を中心とする捨て場遺構北側、I Q・R - 36~38を中心とするやや舌状に張り出した地形の中央部、そしてI M・N - 42~44を中心とする南側にそれぞれ集中域が見られる（図24）。また、斜面下の低地からも少量ではあるが遺物が出土した。出土遺物の詳細については後述するが、出土土器の時期は繩文時代前期～晩期にかけてのものである。これらの分布を見ると、前期初頭～前葉のものは中央部と南側に、前期末葉のものは数少ないものの捨て

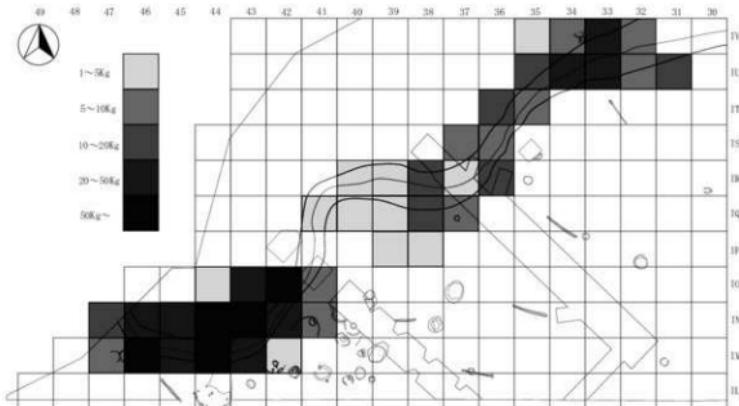


図24 捨て場遺構出土土器重量分布図



図25 繩文時代の遺構分布図

場遺構全域に、中期前葉のものは北側に、中期後～末葉のものは中央部と南側に、後期前葉のものは南側に、後期後葉のものは北側と中央部に、そして晩期のものは南側にそれぞれまとまって分布している。このことから、同一区域を長期間にわたって使用したのではなく、時期によって異なる場所を捨て場として使用していたと考えられる。

捨て場遺構の周辺には、出土遺物とほぼ同一時期の遺構が分布している。特に縄文時代後期前葉・十腰内Ⅰ式期の竪穴住居跡及び土坑は検出数が多く、捨て場遺構南側に隣接してまとまって分布している。

本遺構は出土遺物の年代から、縄文時代前期初頭から晩期中葉にかけて断続的に使用されたと考えられる。また検出された遺構の分布から、縄文時代後期前葉・十腰内Ⅰ式期に最も盛行した可能性が高い。今後、隣接する青森市教育委員会調査区の調査成果を検討することで、捨て場遺構とその他の遺構との関係がさらに明らかになると考える。

(葛城)

1. 土器（図26～41）

繩文時代前期の土器（図26・27）

前期初頭と前葉、末葉の土器が出土している。図26-1～5は平口縁に刺突文とコンバス文の施される土器で、口縁の内側がやや削がれたように稜をもつものである。いずれも堅緻な土器で、文様構成では刺突列帯とコンバス文が重層化しているとみられる図26-2や5のほか、刺突列帯とコンバス文の直下に繩文が施される図26-4等がみられる。図26-6～18は口縁部もしくは底部付近に刺突列帯のあるものである。口縁部は平口縁で、口縁内側には削がれたような稜がみられる。また底部破片では平らな外底面に同心円状の刺突列が巡る。諸特徴からこれらは表館式に比定される。図26-20～23は口縁部に押し引き状の沈線文が巡るもので、早稻田6類に比定される。焼成は堅緻であるが口縁は波状で、口唇部は前述の表館式に比して丸みをもつ。図26-21～23では原体の端部を環状にしたループ文が施文されている。図26-24～42および図27-1～4は前述の表館式から早稻田6類の範疇に収まるとみられる破片で、いずれも堅緻な土器である。ループ文の施されるものの（図26-24・25・27・29・32・38）や原体端部を段状に施文したもの（図26-30・33～37）、羽状繩文の施されるもの（図26-26・28・31）が主体であるが、単節または複節繩文の回転施文されるもの（図26-40～42、図27-1～4）もこの段階のものとみられる。また図26-39は回転方向を違えた0段多条LR繩文の重複するもので、八戸市見立山(1)遺跡（青森県教委1998）で出土している交差繩文土器とされる例に類似するものである。

図27-5～13は外面全体に横位または斜位方向の絡条体による施文がみられるもので、前葉の深郷田式に比定される。口縁には平口縁（図27-5～9）と波状口縁（図27-10）の両方があるようで、底部（図27-12・13）は上げ底状で胴部同様に絡条体で施文されている。内面調整はナデが主体だが、図27-6～8の内面には横方向の条痕がみられる。また図27-11の外面にも絡条体施文のほか縦位の条痕が確認され、平川市永野遺跡第4類土器に類例がみられる（青森県教委1980）。

図27-14～20は末葉の口縁部破片で、繩や単軸絡条体の側面圧痕や回転施文がみられるものである。14～17は胎土に纖維を多く含み、軟質であるが、18～20は纖維をほとんど含まず、堅緻であり、使用される原体も太い。14～17は円筒下層d₁式に、18～20は円筒下層d₂式に比定される。

繩文時代中期の土器（図28～33）

捨て場遺構出土土器の中核をなす一群であり、残存状態も良好なものが多い。捨て場北側の縁辺部であるIR-38・39、IS-36・37、IT-35・36、IU-32・33・34、IV-33グリッド付近から集中的に出土している。型式的には円筒上層a式から同d式に比定されるものが大半である。

図28-1及び2は前葉の円筒上層a式とみられる土器である。図28-1の器高は約60cmを計り、本調査で出土した土器の中では最大のものである。口縁の波頂部はM字状を呈し、直下には隆帯が縦位区画としてX字状に貼り付けられる。隆帯間にLR繩文の側面圧痕が横位、縦位及び鋸歯状に施されている。口縁部直下にはLRL繩文が施文されるが、胴部はLRとRLの結束第1種羽状繩文が施される。図28-2は口縁の波頂部分を欠くが、口縁部には横位の側面圧痕が3条単位で施され、間際に馬蹄形状の圧痕が充填されるものである。

図28-3～6、図29-1～5は口縁部全体への隆帯貼付と、馬蹄形状圧痕が隆帯間に施される土

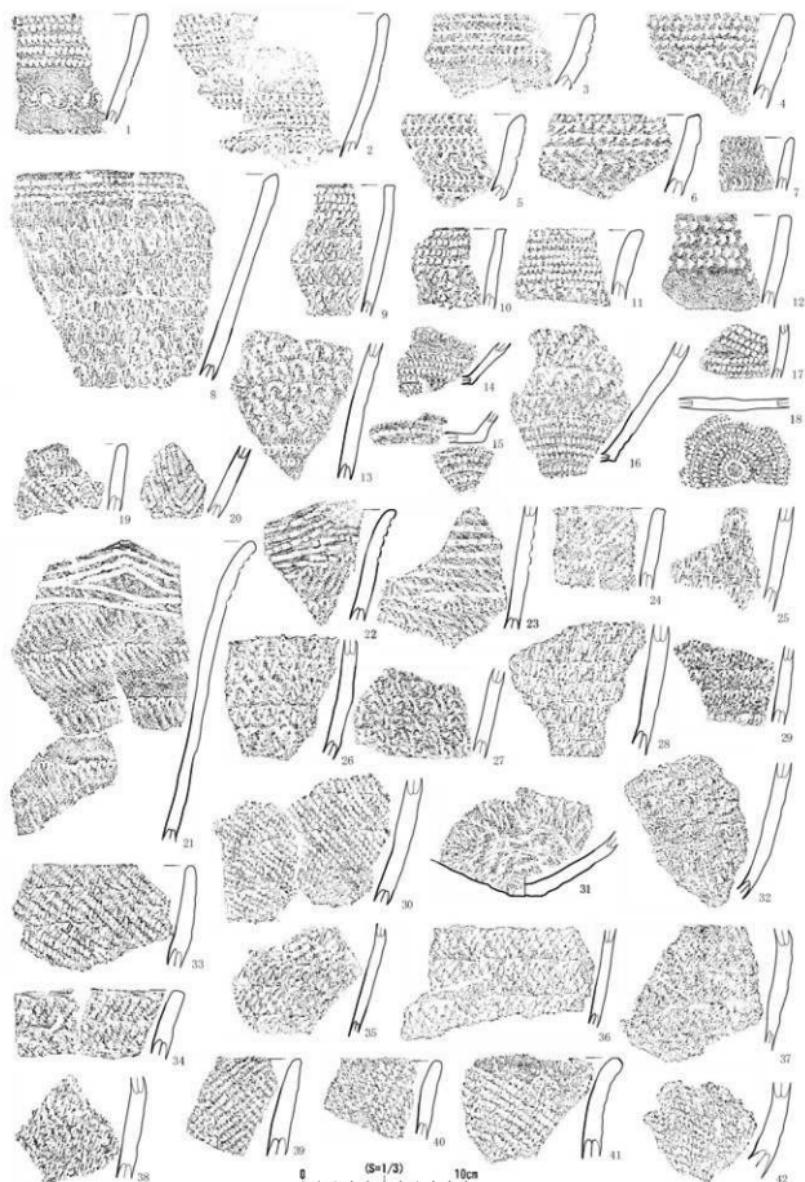


図26 捨て場遺構出土縄文土器(1)

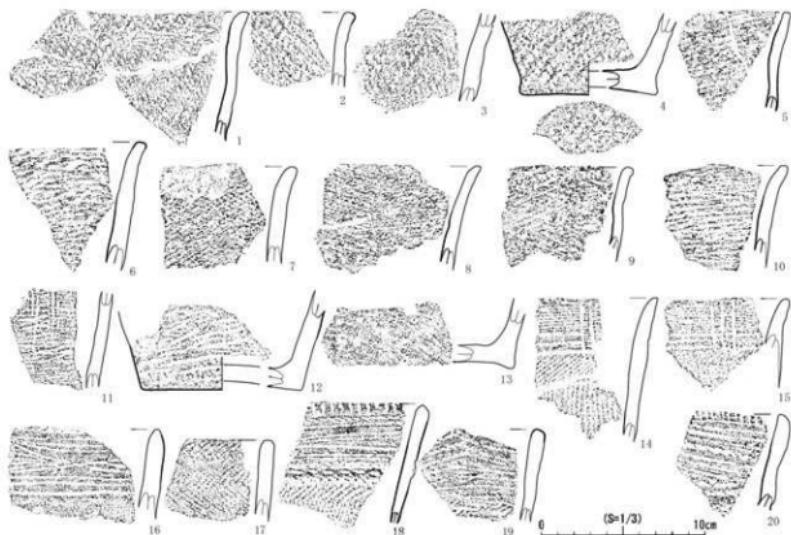


図27 捨て場遺構出土繩文土器(2)

器で、前葉の円筒上層b式に比定される。全て波状の口縁部をもつ深鉢形であるが、最大のものは図29-1で、現存部分の器高で約50cmを計る。口縁部の隆帯は2本単位で垂下するものや、弧状の隆帯の組み合わせられたものであり、バリエーションが豊富であるが、口縁部と胴部の区画隆帯には1つのもの（図28-3・4、図29-3・4）と2つのもの（図28-5・6、図29-1・2・5）の2種が多い。図29-2では区画隆帯間に馬蹄形状圧痕ではなく刺突が施されている。また図29-4は口縁部の片側半面に馬蹄形状圧痕が、別面には縦長の刺突が側面圧痕間に施されており、半面ずつ施文具を変えているものである。胴部への施文はLR繩文とRL繩文の結合第1種羽状繩文が施されるものが多い（図28-3・6等）が、単節繩文が回転施文されるもの（図28-4）、結節回転文が施されるもの（図28-5）もみられる。

図29-6、図30、図31は、口縁部全体への隆帯貼付と、前段階の馬蹄形状圧痕に変えて刺突が施されるもので、前葉の円筒上層c式に比定される。器形は波状口縁（図29-6、図30、図31-1～4）と平口縁（図31-5～6・9～11）の深鉢形があるが、口縁部形状の違いと器高の高低に相間性はみられず、それに大小の深鉢が存在するようである。口縁部の隆帯は前段階の円筒上層b式同様にバリエーションに富むが、口縁部文様帶の幅が広がる傾向がみられ、口唇部には鋸歯状の隆帯が貼り付けられるものが目立つ（図30-2・3・5、図31-2・3・5・6・9～11）。また隆帯そのものは太めで、原体の押圧が施されるものが大半だが、細い隆帯で繩文等が施されないもの（図31-3・6）がみられるほか、口縁部の装飾的な隆帯が無く刺突だけが施されるもの（図31-5・6）も存在する。口縁部と胴部の区画隆帯も前段階同様に1本のもの（図31-1・9）と2本のもの（図29-6、図30、図31-2～4・10・11）がみられるが、区画隆帯部分やその直下に鋸歯状の隆帯

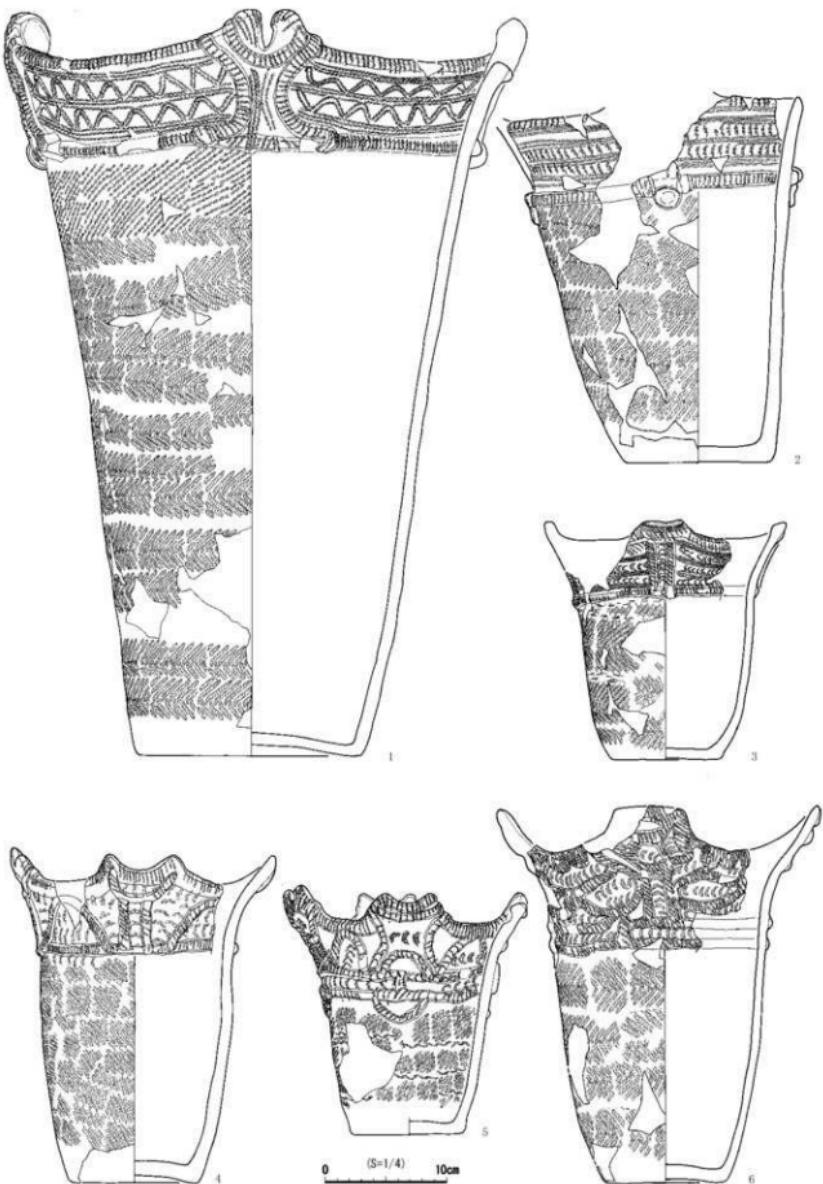


図28 捨て場遺構出土繩文土器(3)